高崎市文化財調査報告書第282集

八幡中原遺跡3

－土地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査－

２０１１

高崎市教育委員会

例　言

1．　本書は、土地分譲に伴う八幡中原遺跡第３次調査の埋蔵文化財調査報告書である。

2．　本遺跡は、群馬県高崎市八幡町字中原 1280 番地２他に所在している。

3．　本調査および整理作業は、高崎市教育委員会が委託契約を締結した有限会社毛野考古学研究所の協力を得て実施した。

4．　発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至る経費は、堀口公正氏に負担して頂いた。

5．　発掘調査の体制は、以下のとおりである。

　高崎市教育委員会　　田口一郎・須田奈保子・滝沢匡

　有限会社毛野考古学研究所　　石丸敦史

6．　発掘調査・整理作業は、平成 22 年８月 24 日～平成 23 年３月 23 日の期間で実施した。

7．　本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で「484」である。

8．　本書の執筆についてはＩを田口、それ以外を石丸が行った。

9．　本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。

10．　発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。

【発掘調査】

青柳美保　大島良江　狩野友好　鎌田裕義　小関泰洋　斉藤清一　関根清子　西山勝久　森田恵子　森山孝男　八木孝枝

【整理作業】

青柳美保　石原理久子　土井道昭　永井祐二　永島美和子　伴場りく　日沖美奈子　深谷道子　真下弘美

11．　発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏にご協力賜わった。記して感謝申し上げる次第である。（敬称略、順不同）

イースタンホーム有限会社　山下工業株式会社　有限会社スミヤ測量　ＪＴ空撮

堀口公正　右島和夫　井上慎也

凡　例

1．　挿図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海抜標高を示す。座標は世界測地系を用いている。

2．　遺構図および遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを付して表示した。また、遺物写真は遺物実測図とほぼ同縮尺である。

3．　土器の色調観察は『新版　標準土色帖』（農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修 2006）を用いた。

4．　土層説明における含有物の量は、多量（50 ～ 30％）･中量（25 ～ 15％）･少量（10 ～ 5 ％）･微量（1 ～ 3 ％）と表記した。なお量の記載のないものは、中量である。

5．　本書掲載の第１図は高崎市発行 1 /2,500「高崎市都市計画基本図」（1 /5,000 に加工）、第２図は、国土地理院発行 1 ／ 200,000 地勢図「長野」･「宇都宮」、第３図は、国土地理院発行 1 /50,000 地形図「下室田」･「富岡」を一部改変引用した。

目　次

例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　地理的・歴史的環境……2
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　調査の方法と経過……5
　1　調査の方法……5
　2　調査の経過……5
Ⅳ　基本層序……6
Ⅴ　検出された遺構と遺物……6
　1　遺跡の概要……6
　2　竪穴建物跡・竪穴状遺構……9
　3　基壇状遺構……18
　4　掘立柱建物跡……20
　5　溝……23
　6　土坑・ピット……27
　7　大形礫……31
　8　出土した遺物の概要……32
Ⅵ　まとめ……41
報告書抄録

図表目次

第1図　調査区位置図……1
第2図　遺跡の位置……2
第3図　周辺の遺跡……4
第4図　基本層序……6
第5図　調査区配置図……6
第6図　八幡・中原遺跡概要図……7
第7図　八幡・中原遺跡調査区全体図……8
第8図　ＳＩ－01……13
第9図　ＳＩ－02……14
第10図　ＳＩ－03……14
第11図　ＳＩ－04……15
第12図　ＳＩ－07……15
第13図　ＳＩ－08……16
第14図　ＳＩ－09……16
第15図　ＳＩ－10……16
第16図　ＳＩ－11……17
第17図　ＳＩ－12……17
第18図　ＳＴ－01……17
第19図　ＳＴ－02……17
第20図　ＳＸ－01……19
第21図　ＳＢ－03……21
第22図　ＳＢ－04……22
第23図　ＳＢ－05……22
第24図　ＳＤ－01……24
第25図　ＳＤ－02……25
第26図　ＳＤ－04……25
第27図　ＳＤ－03……26
第28図　1区南側土坑・ピット群（1）……28
第29図　1区南側土坑・ピット群（2）……29
第30図　2区西側土坑・ピット群……29
第31図　3区南側土坑・ピット群……30
第32図　大形礫……31
第33図　出土遺物実測図（1）……33
第34図　出土遺物実測図（2）……34
第35図　出土遺物実測図（3）……35
第36図　出土遺物実測図（4）……36
第37図　出土遺物実測図（5）……37
第38図　東山道と主要遺跡……43
第39図　周辺遺跡状況……43

表1　周辺遺跡一覧……4
表2　遺物観察表（1）……37
表3　遺物観察表（2）……38
表4　遺物観察表（3）……39
表5　遺物観察表（4）……40

写真図版目次

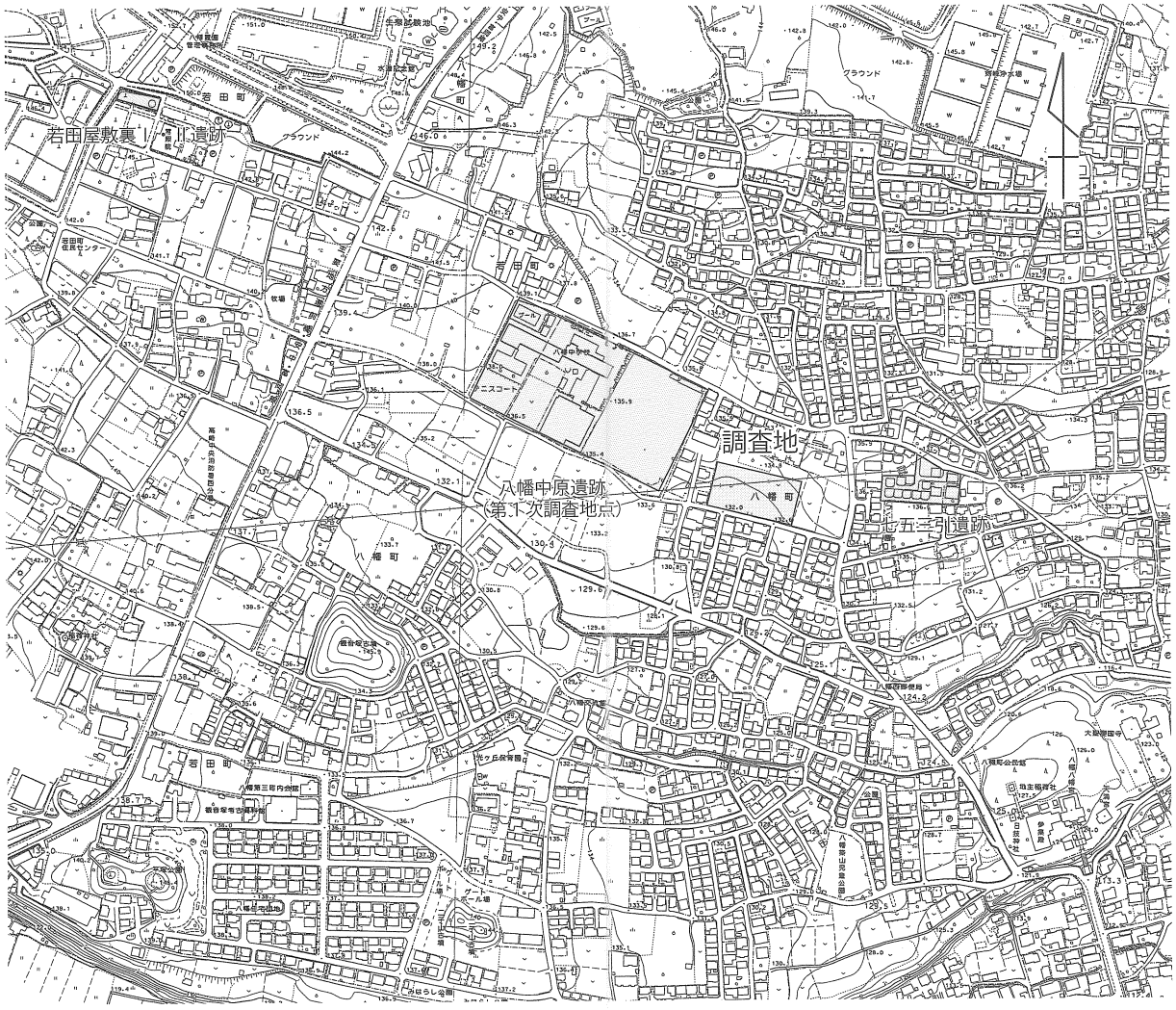
ＰＬ1　遺跡全景
　SD－03号溝（南より）
ＰＬ2　基本土層
　SI－01号住土層堆積状況
　SI－02号住土層堆積状況
　SI－03号住土層堆積状況
　SI－01号住全景
　SI－02号住全景
　SI－03号住全景
　SI－04号住全景
ＰＬ3　SI－04号住土層堆積状況
　SI－07号住土層堆積状況
　SI－09号住全景
　SI－10号住全景
　SI－07号住全景
　SI－08号住全景
　SI－09号住土層堆積状況
　SI－10号住土層堆積状況
ＰＬ4　SI－10号住内SK－01土層堆積状況
　SI－11号住Ｐ1土層堆積状況
　SI－12号住Ｐ1遺物出土状況
　SX－01（SI-05部分）土層堆積状況
　SI－11号住・SD－01号溝全景
　SI－12号住全景
　SX－01（SI-05部分）床面検出状況
　SX－01（SI-05部分）掘り方全景
ＰＬ5　SX－01（SI-13部分）床面検出状況
　SX－01（SI-13部分）土層堆積状況②
　SX－01（SI-14部分）床面検出状況
　SX－01（SI-14部分）土層堆積状況②
　SX－01（SI-13部分）土層堆積状況①
　SX－01（SI-13部分）掘り方全景
　SX－01（SI-14部分）土層堆積状況①
　SX－01（SI-14部分）掘り方全景
ＰＬ6　SX－01（SI-14部分）版築状況
　ST－02号竪穴全景
　SB－03号掘立Ｐ1土層堆積状況
　SB－04号掘立全景
　ST－01号竪穴全景
　SB－03号掘立全景
　SB－03号掘立Ｐ4土層堆積状況
　SD－01号溝土層堆積状況
ＰＬ7　SD－02号溝全景
　SD－03号溝（北区）全景
　SD－03号溝土層堆積状況①
　SD－03号溝土層堆積状況③
　SD－02号溝土層堆積状況
　SD－03号溝（南区）全景
　SD－03号溝土層堆積状況②
　SD－03号溝西壁刳り込み
ＰＬ8　SD－03号溝東壁刳り込み
　SD－04号溝全景
　2号大形礫全景
　3号・4号大形礫全景
　SD－03号溝遺物出土状況
　1号大形礫全景
　2号大形礫工具痕
　発掘作業風景
ＰＬ9　出土遺物（1）
ＰＬ10　出土遺物（2）
ＰＬ11　出土遺物（3）

Ⅰ　調査に至る経緯

平成22年4月、堀口　公正氏（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に宅地造成工事予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、照会地は埋蔵文化財包蔵地であり、周辺の八幡中原遺跡や七五三引遺跡等で古墳～平安時代を中心とする集落跡が調査されており、当該地にも及ぶ可能性が高いことから、試掘調査による確認を実施し工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。
同年5月18日付けで事業者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年6月22～24日に工事予定地の試掘調査を実施し、縄文～平安時代の遺構を確認した。

試掘結果を受けて埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、計画変更は不可能ということなので、道路建設部分に関して記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、有限会社毛野考古学研究所に委託して実施することとなり、平成22年4月1日付けで高崎市長・事業者・毛野考古学研究所の三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成22年4月1日付けで事業者と毛野考古学研究所の二者で発掘調査委託契約が締結された。



第1図　調査区位置図

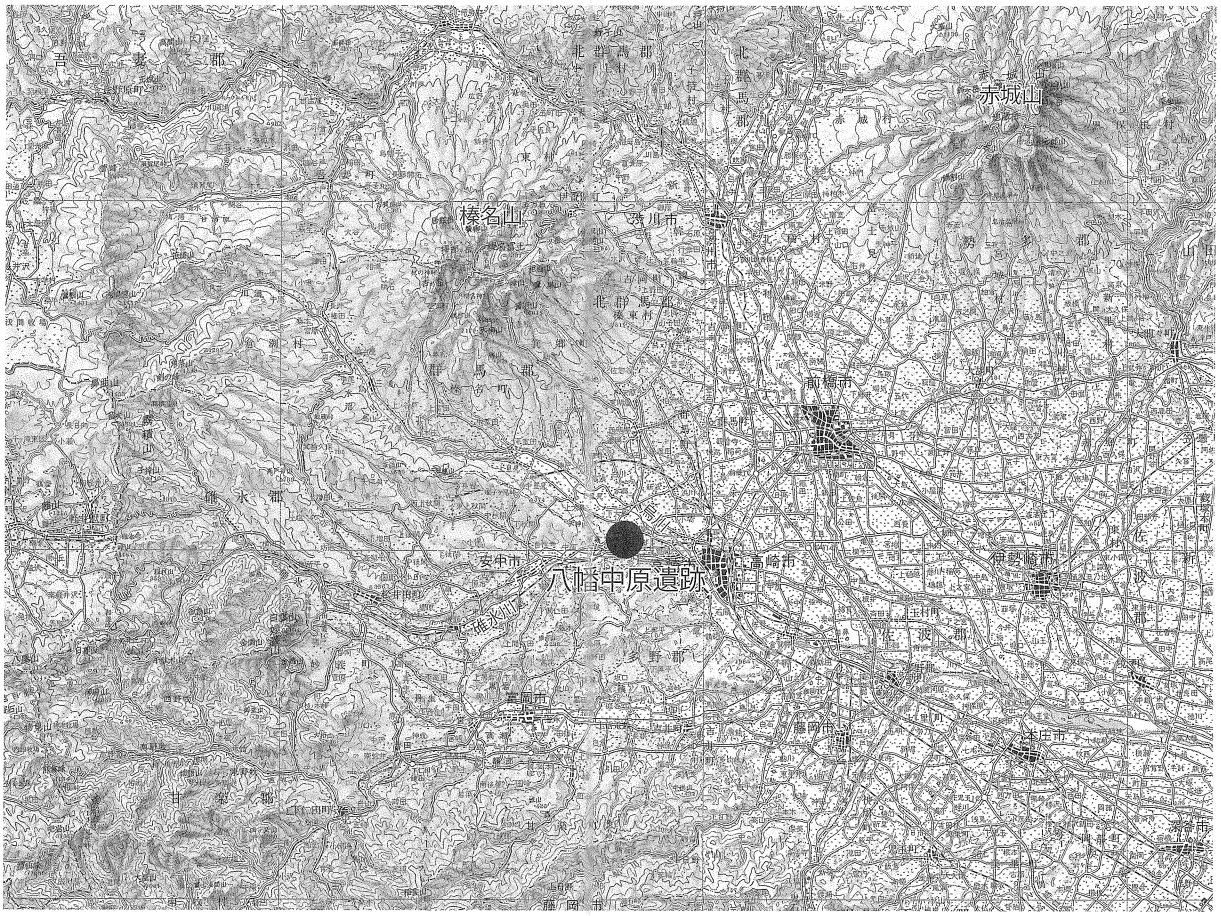
Ⅱ　地理的・歴史的環境

1　地理的環境

八幡中原遺跡は、北側を烏川、南側を碓氷川に挟まれた台地上に立地する（通称、八幡台地）。烏川より北側には榛名山からの扇状地がひろがり、碓氷川の南側には観音山丘陵と呼ばれる標高 200 ～ 300 mの低丘陵が東西にのびる。

八幡台地は、安中市の秋間丘陵から連続する第三紀系丘陵の先端部にあたり、その南北両側は烏川・碓氷川による急峻な河岸段丘を形成する。遺跡周辺の標高は、133 ～ 135 mを計測し、台地下の碓氷川周辺では標高 110 m前後を計測することからその比高差は 20 ～ 30 m程度あることになる。台地は大きくは西から東の烏川と碓氷川との合流点へ向かって収束していくが、八幡中原遺跡が位置する台地東側一帯では、東西にのびる２本の小支谷によって台地は大きく３つに分けられる。八幡中原遺跡は、その東西にのびる３つの台地のうち中央の台地に位置する。

遺跡周辺は早くから宅地造成が進み旧来の地形・地割の把握が困難になりつつある。現況は宅地が大きく広がっているが、依然として畑地も各所で見られる。



第２図　遺跡の位置

2　歴史的環境

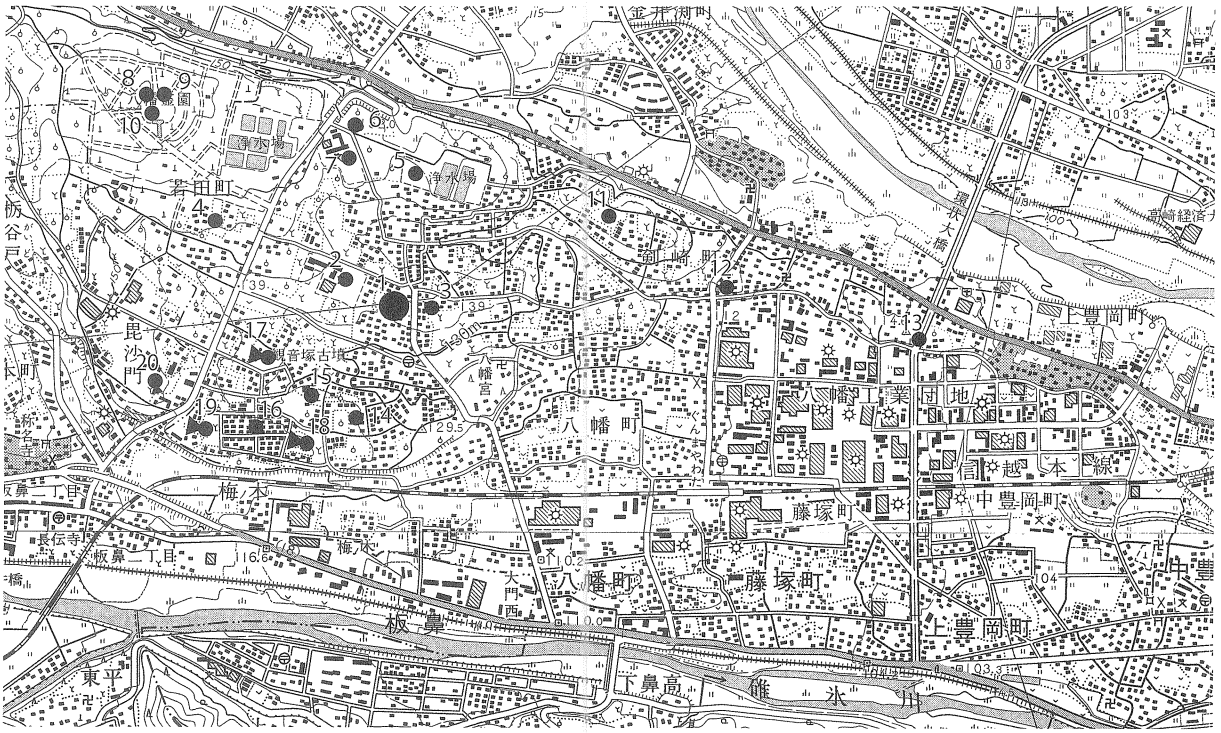
先述したように八幡中原遺跡のある一帯は、小支谷によって３つの台地が東西にのびるが、それぞれの台地状において密に遺跡が分布している。

まず八幡中原遺跡のある中央の台地では、八幡中原遺跡第１次調査地点（第３図－２）において、古墳時代中期から古代に至る拠点的集落が確認されている。本集落は西約 750 mで調査された若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡（４）まで連続しているとされており、非常に大規模な集落であったことがわかる。またその内容も、子持勾玉が出土するなどの祭祀的性格をもつ住居跡（156 号住居跡）や四周に溝を設ける掘立柱建物跡（３号掘立柱建物跡）などが特筆される。さらに韓式系土器が古墳時代後期の住居跡から出土している。韓式系土器は七五三引遺跡（３）でも格子状タタキ目を有する韓式系土器が認められている。おおむね現状ではこの中央の台地では縄文時代のまとまった集落は確認されておらず（若田原遺跡群から連続すると推測される縄文時代住居跡１棟が若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡で確認されている）、本格的に集落が営まれるのは古墳時代以降のようである。

北の台地では、縄文時代からの集落が確認されている。若田原遺跡（10）では、縄文時代前期末の住居跡や、中期後半の柄鏡形敷石住居跡２棟が検出されている。また大島原遺跡（７）では、縄文時代の竪穴住居跡が３棟確認されている。弥生時代の遺跡としては、剣崎長瀞西遺跡があり、櫛描文系土器を主体とする弥生時代後期～古墳時代初頭に至る竪穴住居跡が 78 棟検出されている。古墳時代の集落は、剣崎長瀞西遺跡が中心となる。そこでは韓式系土器が多く出土しており、５世紀中葉に位置づけられる住居跡からカマドが確認されている。また土坑から梯子形立聞付Ｘ字銜留楕円形鏡板付轡が、10 号墳からは金製垂飾付耳飾が出土しており、渡来系文物が多く認められる。古墳は、剣崎長瀞西遺跡において三角板革綴短甲や多量の石製品・石製模造品が出土した剣崎長瀞西古墳のほか、方形積石塚古墳を含む群集墳が広がっている。本古墳群は大島遺跡で確認された古墳群７基に連続するものと想定される。また若田原遺跡では横穴式石室を有する円墳である若田大塚古墳や楢ノ木古墳など計７基が調査されている。古代では剣崎稲荷塚遺跡（11）があり、９世紀から 11 世紀代の竪穴住居が確認されている。また２号住居跡からは小金銅像２体が出土しており、11 世紀代に位置づけられている。この北の台地の東側には、弥生時代の遺構が多く認められた引間遺跡（13）や奈良・平安時代の大規模集落である豊岡後原Ⅰ・Ⅱ遺跡がある。

南の台地には、平塚古墳（19）をはじめ二子塚古墳（18）・観音塚古墳（17）などの前方後円墳が築造される。なお観音塚古墳は中央の台地との境にある小支谷に面している。この台地において中核となるのは、八幡遺跡（16）である。そこでは弥生時代後期から奈良・平安時代にかけて竪穴住居跡が 119 棟検出されている。なかでも６世紀後半の住居跡は、その形態・規模などから墓守・殯屋的な性格が推測されている。

このように八幡台地は、古墳時代以降、拠点的な集落を広く営むようになる。とくに古墳時代中期には渡来系文物を多く受容し、古墳時代中期以降大形前方後円墳を築造する。そして古代以降は、八幡中原遺跡のような大規模な集落を造営するのである。この一帯は、東山道において野後駅（安中）から群馬駅（前橋市総社町付近）へ北上する「国府ルート」と野後駅からまっすぐ東へ向かうとされる「牛堀・矢ノ原ルート」との分岐点にあたり交通の要衝としての性格を有する。



第３図　周辺の遺跡

表１　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	概要	文献
1	八幡中原遺跡（第３次）	本報告	
2	八幡中原遺跡（第１次）	古墳時代～奈良・平安時代住居跡 176 棟、掘立柱建物跡 36 棟、韓式系土器	『八幡中原遺跡』高崎市文化財調査報告第 31 集　1982
3	七五三引遺跡	古墳時代中～後期住居跡７棟、土壇状遺構、韓式系土器	『七五三引遺跡』高崎市遺跡調査会報告書第６集　1984
4	若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡	縄文時代住居跡１棟、古墳～平安時代住居跡 27 棟、掘立柱建物跡７棟	『若田屋敷裏Ⅰ・Ⅱ遺跡』高崎市文化財調査報告書第 156 集　1998
5	剣崎長瀞西遺跡	縄文～奈良時代住居跡、積石塚古墳、馬埋葬土坑、韓式系土器、金製垂飾付耳飾り、初期馬具	『剣崎長瀞西遺跡１』高崎市文化財報告書第 179 集　2002 『剣崎長瀞西遺跡２』高崎市文化財調査報告書第 190 集　2004
6	剣崎長瀞西古墳	帆立貝形？短甲、捩形文鏡、滑石製品、鉄製鉾、鉄鏃、円筒埴輪、家形埴輪、須恵器	『剣崎長瀞西遺跡１』高崎市文化財報告書第 179 集　2002
7	大島原遺跡	縄文時代住居跡３棟、古墳時代中期住居跡 11 棟、古墳７基	『高崎市史』資料編１　2000
8	楢ノ木塚古墳	円墳、横穴式石室	『群馬県史』資料編３　1981
9	若田大塚古墳	円墳（径 29.5m）、自然石乱石積竪穴式石室、鉄槍	『高崎市史』資料編１　2000
10	若田原遺跡群	縄文時代前期末住居跡１棟、縄文時代中期住居跡 20 棟以上（柄鏡形敷石住居２棟）	『高崎市史研究』３　1993
11	剣崎稲荷塚遺跡	縄文時代前期・中期・後期住居跡、平安時代住居跡 13 棟、小金銅像	『剣崎稲荷塚遺跡』　高崎市遺跡調査会報告書第 72 集　1998
12	剣崎天神山古墳	円墳か、滑石製琴柱形石製品１・鏡形２・坩形１・槽形１・杵形・手斧形１・鎌形１・刀子形 71、1963 年消滅	外山和夫　「石製模造品を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐって」『考古学雑誌』62 巻２号　1976
13	引間遺跡	弥生時代後期住居跡 37 棟、弥生時代後期方形周溝墓、古墳時代前期～後期住居跡 25 棟、和同開珎	『引間遺跡』　高崎市文化財調査報告書第５集　1979
14	八幡六枚遺跡	弥生～奈良・平安時代の住居跡、古墳時代石製模造品	
15	四ノ市遺跡	弥生～古墳時代の住居跡	『群馬県史』資料編２　1986
16	八幡遺跡	縄文時代前期・後期土器片、弥生時代後期住居跡 52 棟、古墳時代住居址 43 棟、銅釧、子持勾玉	『八幡遺跡』　高崎市文化財調査報告書第 91 集　1989
17	観音塚古墳	前方後円墳（墳長 96 m）、横穴式石室、銅鏡、大刀、馬具、銅椀、鉄鏃、金環、銅釧、須恵器等	『群馬県史』資料編３　1981 『高崎市史』資料編１　2000
18	二子塚古墳	前方後円墳（墳長 66.5 m）、横穴式石室	『八幡二子塚古墳』　高崎市遺跡調査会報告書第 71 集　1998
19	平塚古墳	前方後円墳（墳長 105 m）、舟形石棺２、円筒埴輪	『群馬県史』資料編３　1981
20	龍的塚古墳	前方後円墳（帆立貝形古墳か）、墳長 20 m、円筒埴輪	『上毛古墳綜覧』　1938

Ⅲ　調査の方法と経過

1　調査の方法

表土除去は、0.25㎥バックホーを用いて、ローム漸移層上面まで行った。一部耕作による深い掘削が広く行われていた箇所があり（２区西側）、その一帯においてはローム層近くまで検出面を下げた。

表土除去後、人力による遺構検出および遺構掘削を行った。遺構掘削は、層位的に遺物を取り上げるためにまずサブトレンチを東西方向に設定し、土層の堆積状況を確認した。その後、土層堆積状況をもとに層位ごとに全体を掘削した。建物跡は十字にベルトを残し、その他は適宜ベルト観察および半裁を行い、土層堆積状況を記録した。

遺構測量は、トータルステーションおよび電子平板を用い、平面図および断面図を作成した。座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、調査の進捗状況に応じて撮影した。35mm モノクロ・35mm カラーリバーサル・デジタルカメラ（1,200 万画素相当）を使用した。

2　調査の経過

現地での発掘調査は 2010 年 8 月 24 日～ 2010 年 10 月 6 日まで行った。

8 月 24 日　発掘機材の搬入。重機による表土除去を開始。

8 月 26 日　発掘作業員導入。１区の遺構検出を開始。基準点測量を行う。

8 月 27 日　１区の遺構掘削・調査を開始。検出時から遺物は希少であるが、竪穴状の不鮮明なプランが北側を中心に複数広がっていることがわかった。

9 月 2 日　２区遺構検出開始。１区南側掘立柱建物跡の調査開始。掘立柱建物跡の調査に際しては、柱穴を 5 cm 掘削後、柱痕の有無を確認しながら行った。

9 月 3 日　２区遺構掘削・調査開始。２区西側は攪乱が広くわたっていたため、検出面をローム層近くまで下げたところ、竪穴建物跡１棟・溝２条・土坑・ピットが検出された。

9 月 6 日　３区遺構検出開始。SD － 03 に堆積した浅間 B 軽石が検出されたため、耕作土直下黒色土中で遺構検出を行った。

9 月 15 日　遺構調査がおおむね終了し、空撮の準備を開始する。

9 月 22 日　空撮を行う。

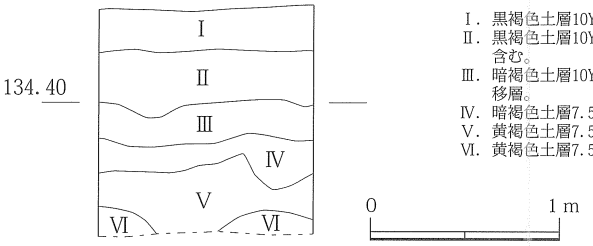
9 月 24 日　掘り方調査および補足調査を開始する。１区北側で掘り込み地業を確認する。平面検出で、複数単位が連続していることがわかっていたため、サブトレンチによってその状況を確認後、掘削を行った。

10 月 1 日　掘削作業終了。測量作業を継続して行う。

10 月 6 日　現場撤収作業完了。

Ⅳ　基本層序

本遺跡の土層堆積状況は最上層に浅間Ａ軽石を含む耕作土（Ⅰ層）、その下に浅間Ａ軽石・浅間Ｂ軽石が混合する耕作土（Ⅱ層）、そしてローム漸移層（Ⅲ層）が堆積する。基本的にはⅡ層直下、Ⅲ層上面（現地表面より約 50cm 下で遺構検出を行った。部分的に耕作による深い掘削が広く行われていた箇所（２区西側）があり、その部分についてはローム層近くまで検出面を下げた。



Ⅰ．黒褐色土層10YR　粘性あり・しまりややあり　As-A・As-B軽石を含む。耕作土。
Ⅱ．黒褐色土層10YR　粘性・しまりあり　As-B軽石をわずかに含む。As-C軽石を極少量含む。
Ⅲ．暗褐色土層10YR　粘性・しまりあり　ローム粒・ロームブロックを含む。ローム漸移層。
Ⅳ．暗褐色土層7.5YR　粘性・しまりあり　黄褐色パミスを含む。ソフトローム。
Ⅴ．黄褐色土層7.5YR　粘性・しまりあり　ハードローム。
Ⅵ．黄褐色土層7.5YR　粘性なし・しまりあり　As-YP層。

第４図　基本層序

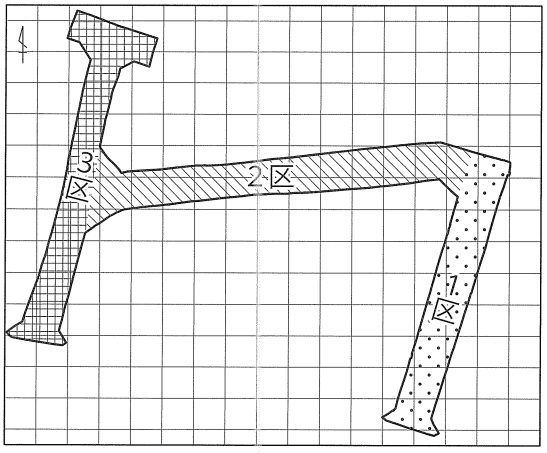
Ⅴ　検出された遺構と遺物

１　遺跡の概要

地形の概要

調査区は便宜的に東側南北部分を１区、中央東西部分を２区、西側南北部分を３区と呼称した（第５図）。各調査区は独立しておらず連続している。

地形は全体的には北から南に向かって傾斜している。詳細をみると、３区一帯が南から小支谷が入り込み周囲より低くなっていることが、現況でも確認できる。調査の結果、それは南北による SD－03 号溝に起因するものと想定された。比較的長い間、滞水するような状況にあったようで、その周辺からは、シルトを含む粘性の強い黒色土が堆積していた。そのため３区一帯の黒色土（Ⅰ・Ⅱ層）は、１区よりも明度の落ちるより黒色を帯びる堆積土となっていた。



第５図　調査区配置図

そしてその３区一帯から東と西側に向かって緩やかに標高が高くなっていき、１区北側が調査区内において最も標高の高い地点となる。２区は、耕作による幅約 50cm のトレンチャーが北西から南東方向へ幾条も走っており、撹乱はローム層にまで及んでいる。なお１区南端部は急峻に落ち込むが、これは後世の道路造成によるものと思われる。

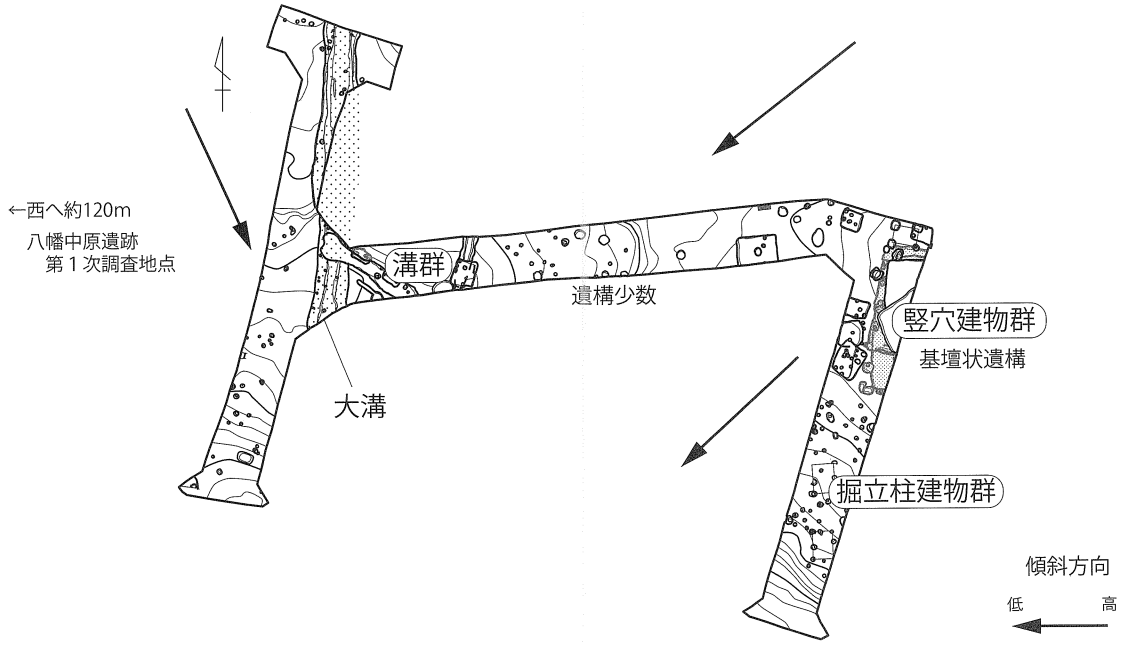
遺構の概要

今回の調査では、竪穴建物跡 10 棟、基壇状遺構１棟、掘立柱建物跡２棟、竪穴状遺構２基、溝４条、土坑・ピット 104 基が確認された（第６・７図）。

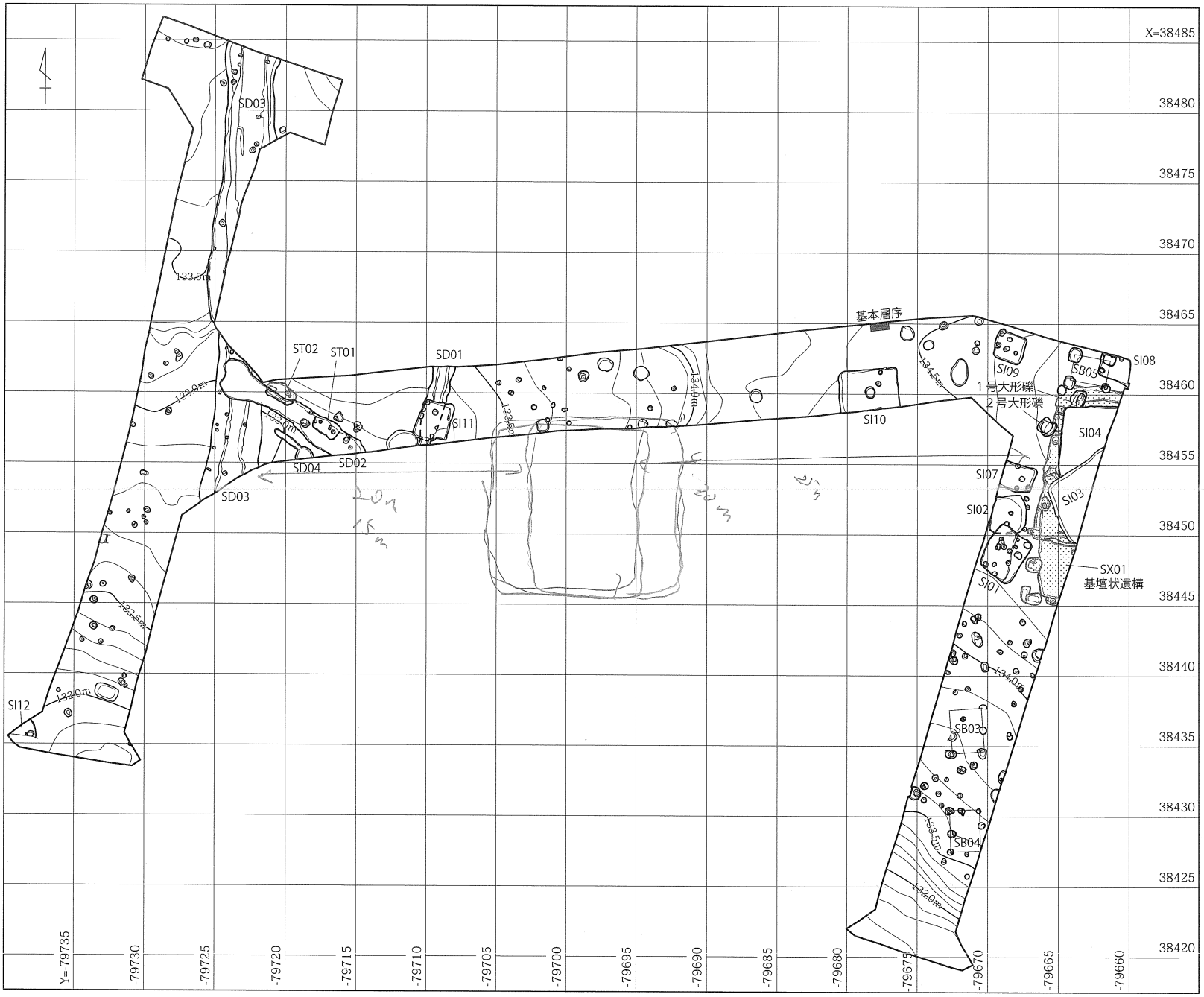
遺構の分布をみると、１区では南側に掘立柱建物群が広がり、その北側の高い位置に竪穴建物跡群が集中して展開する。１区北側の建物跡群は、基壇状遺構（SX － 01）の周囲に、竪穴を有するものが広がる（SI － 01・SI － 02・SI － 07・SI － 08）。それらの帰属時期および機能については明確には出来なかった。なお、SI － 03・SI － 04 は、SX － 01 の直上で検出されたもので、SX － 01 との区別は明瞭ではなかった。また、１区北側では検出面直上においても近現代所産の遺物が出土しており、小規模な撹乱が多く広がっていたものと思われる。

２区は撹乱が広くわたっていたこともあり、ローム層上面まで検出面を下げた。表土除去中に出土した遺物も非常に少なく、本来的に遺構の分布が希薄であったものと想定される。２区ではおもに土坑・ピット・溝が確認された。ピットには直線的に並ぶ配列のものもあり、柵列の可能性も指摘される。SD － 01 号溝は南北に走る溝であるが、流水の痕跡はなく、区画溝の可能性が想定される。

３区では大形の溝 SD － 03 号溝が南北に走る。遺構検出面は、SD － 03 覆土中の As-B 軽石の上面で行った。SD － 03 周辺は手掘りによって検出面を下げながら遺構検出を行った。しかし、遺構の分布は希薄で、竪穴建物跡が１棟とピット群が検出された。西から続く八幡中原遺跡（第１次調査区・第２次調査区）の集落域は、いったんここで区画されるものと考えられる。



第６図　八幡・中原遺跡（第３次調査）概要図



第７図　八幡・中原遺跡（第３次調査）調査区全体図

2　竪穴建物跡・竪穴状遺構

竪穴を有するものは10棟・2基確認された。しかしその上屋構造については不明瞭なものがほとんどであり、竪穴式住居跡と通称されるものはなかった。

ここでは人為的な掘り込みによる竪穴を有するものを報告する。なお遺構略称SI・STは調査時において機械的に付したもので、その区別は必ずしも遺構の性格を規定するものではない。

ＳＩ－01　（第8・33図）

平面形態　隅丸長方形

規模　南北3.36 m×東西2.84 m

主軸方位　N－33.5°－E

遺構所見　平面検出時のプランは不明瞭であった。壁面は地山ローム層を掘り込んでいるが、緩やかな立ち上がりをなす。床面には顕著な硬化面は認められなかった。竪穴西側は一段落ち込んでおり、その平面形態は不整形である。竪穴内において柱穴状の掘り込みは複数検出されたが、主柱穴の構成は不明である。燃焼施設および焼土は検出されていない。覆土は自然堆積で、地形の傾斜に沿うように東から西へ流入している。遺構の切り合い関係はSI－01→SI－02の先後関係を土層観察において確認できた。

遺物所見　遺物は覆土の堆積が浅かったため層序区分をせずに取り上げた。遺物は小破片が覆土中より出土したのみである。出土した遺物は、土師器片249 g、須恵器片49 g、縄文土器片20 gである。そのうち図化に及んだ遺物は、土師器片2点（1・2）である。いずれも土師器の坏で、7世紀末～8世紀前半に位置づけられる。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。出土遺物等から判断して、古代以降に帰属するものと考えられる。

ＳＩ－02　（第9・33図）

平面形態　隅丸方形

規模　南北2.64 m×東西2.50 m

主軸方位　N－6°－E

遺構所見　平面プランは明瞭に検出できた。壁面は緩やかな立ち上がりをなし、竪穴四隅部分は不明瞭になる。床面はとくに硬化面はなしてはいない。柱穴は竪穴内に1基、竪穴外に3基ある。燃焼施設および焼土は検出されていない。覆土は自然堆積で、東西両方向から流入している。遺構の切り合い関係はSI－01→SI－02の先後関係を土層観察において確認できた。

遺物所見　遺物は、覆土が浅くほぼ単一土層であったため、層序区分をせずに取り上げた。遺物は小破片が覆土中より出土したのみである。出土した遺物は、土師器片416 g、須恵器片56 g、縄文土器片55 gである。そのうち図化に及んだものは、土師器坏2点（1・2）、須恵器蓋1点（3）、須恵器坏1点（4）である。土師器坏（1）は内斜口縁坏、2は有段口縁坏である。須恵器蓋（3）は8世紀代、須恵器坏（4）は7世紀代後半に位置づけられる。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。出土遺物等から判断して、古墳時代中期以降～古代に帰属するものと考えられる。

ＳＩ－03　（第10・33図）

平面形態　方形

規模　南北（4.6 m）

主軸方位　N－53°－E

遺構所見　検出時において平面プランは不明瞭であった。とくに西壁についてはプランが明瞭であったものの、北壁についてはサブトレンチによる土層観察によってプランを確定した。壁面はとくに硬化はしていなかった。床面は平坦で堅緻な硬化面をなしていたが、下層の遺構である掘り込み地業（SX－01）に起因している可能性がある。柱穴は確認されていない。燃焼施設および焼土は検出されていない。覆土は自然堆積である。平面検出状況等からSI－04→SI－03の切り合い関係を把握した。

遺物所見　遺物は、覆土が浅くほぼ単一土層であったため、層序区分をせずに取り上げた。出土した遺物は、土師器片214 g、須恵器片41 g、中近世土器片91.6 g、縄文土器片26 g、石器2点245 gである。そのうち図化に及んだ遺物は、土師器坏1点（3）、磁器碗2点（1・2）である。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。出土遺物等から判断して、古代以降に帰属するものと考えられる。

ＳＩ－04　（第11・33図）

平面形態　方形

規模　不明

主軸方位　N－6°－E

遺構所見　平面プランは明瞭に検出できた。壁面は地山ローム層で緩やかに立ち上がる。覆土は堅く締まっていたが、おそらく本遺構の下層にある掘り込み地業（SX－01）と関連するものと考えられる。床面は堅緻な硬化面をなしているが、これも下層の掘り込み地業と関連していると想定される。柱穴は確認されなかった。燃焼施設および焼土は検出されなかった。平面検出状況等からSI－04→SI－03の切り合い関係を把握した。

遺物所見　遺物は、覆土が浅くほぼ単一土層であったため、層序区分をせずに取り上げた。出土した遺物は、土師器片424 g、須恵器片115 g、中近世土器片261 gである。そのうち図化に及んだものは、土師器坏2点（1・2）、須恵器蓋1点（3）である。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。出土遺物等から判断して、古代以降に帰属するものと考えられる。

ＳＩ－07　（第12・33図）

平面形態　長方形

規模　南北1.9 m

主軸方位　N－20°－E

遺構所見　平面検出時におけるプランは明瞭であった。ローム二次堆積層が遺構上面に広がっており、それを除去した段階で遺構は検出された。床面はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面はなしてはいなかった。壁面は地山ローム・黒色混土層が緩やかに立ち上がる。竪穴南東隅角部分にピットが2基確認されたが、その深度は浅い。覆土は自然堆積で、ほぼ水平に堆積している。燃焼施設・焼土は検出されていない。

遺物所見　遺物は、覆土が浅くほぼ単一土層であったため、層序区分をせずに取り上げた。出土した遺物は、土師器片135 g、須恵器片79 g、中近世土器片58 gである。図化に及んだ遺物は、土師器高坏片（1）1点である。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。出土遺物等から判断して、古墳時代以降に帰属するものと考えられる。

ＳＩ－08　（第13図）

平面形態　方形

規模　不明

主軸方位　Ｎ－17°－Ｅ

遺構所見　平面検出時のプランは不明瞭であった。ローム二次堆積層が遺構上面に広がっており、それを除去した段階で遺構は検出された。壁面は地山ローム・黒色混土層で比較的まっすぐ外方へ立ち上がる。床面は地山ローム層が平坦に成形されているが、顕著な硬化面は検出されなかった。柱穴は１基確認された。燃焼施設および焼土は検出されなかった。覆土は自然堆積でレンズ状に堆積する。

遺物所見　平面検出プランが不鮮明で、掘削しながらプランを確定していったため、層序区分による遺物取り上げはできなかった。ただし床面より出土した遺物はない。出土した遺物は、土師器片44ｇ、須恵器片３ｇである。図化に及んだ遺物はない。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。出土遺物等から判断して、古代以降に帰属するものと考えられる。

ＳＩ－09　（第14・33図）

平面形態　正方形

規模　南北1.96ｍ×東西2.16ｍ

主軸方位　Ｎ－19°－Ｅ

遺構所見　平面検出時のプランは明瞭であった。壁面は地山の黒色土・ローム混土層が緩やかに立ち上がる。床面は地山ローム層で成形されるが、硬化面は認められず、かつ平坦面をなさない。柱穴は５基検出され、西壁際の２基は深い掘り方をもつ。竪穴外の柱穴の検出も努めたが確認できなかった。燃焼施設および焼土は検出されていない。覆土は自然堆積で単一土層である。

遺物所見　遺物は、覆土が浅く単一土層であったため、層序区分をせずに取り上げた。出土した遺物は、土師器片14ｇ、須恵器片８ｇ、石器１点315ｇである。そのうち図化に及んだ遺物は、土師器坏１点（１）である。１は７世紀代後半に帰属するか。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。出土遺物等から判断して、古代以降に帰属するものと考えられる。

ＳＩ－10　（第15・33図）

平面形態　方形

規模　東西4.24ｍ

主軸方位　Ｎ－６°－Ｗ

遺構所見　検出時の平面プランは明瞭であった。壁面は地山ローム・黒色土層が緩やかに立ち上がる。床面は地山ローム層で、顕著な硬化面は認められず、ほぼ平坦面をなしている。住居中央には床下土坑が１基確認された。覆土にはロームブロックを多く含んでおり、人為的埋没と想定される。柱穴は確認されていない。燃焼施設および焼土は検出されていない。

遺物所見　遺物は、覆土が浅く単一土層であったため、層序区分をせずに取り上げた。床面付近より滑石製臼玉、その付近から鉄製品が出土している。また安山岩製の台石が１点床面より出土している。出土した遺物は、土師器片100ｇ、須恵器片85ｇ、中近世土器片44ｇである。そのうち図化に及んだものは、須恵器蓋１点（１）、刀子片１点（２）、臼玉１点（３）である。

時期　本遺構の帰属時期の詳細は不明である。古墳時代後期か。

ＳＩ－11　（第16・33図）

平面形態　方形

規模　南北2.80 m×東西2.30 m

主軸方位　N－67°－E

遺構所見　SD－01号溝の掘削中に確認されたため、切り合い関係を明瞭に把握する方法がとれなかった。しかしSD－01の平面検出状況や掘削中の覆土の状況などからSI－11→SD－01の切り合い関係が推定された。壁面は地山ローム層がまっすぐ立ち上がる。ただし南東隅角部分は、地山ローム層が角度のある斜位に成形される。断ち割り調査を行ったところ、地山ローム層であった。床面は、顕著な硬化面はなさず、地山ローム層が平坦に成形される。竪穴中央北側に掘り方の深い柱穴が1基検出された。また壁際には柱痕状の凹みが検出された。覆土は自然堆積でレンズ状に堆積する。ただしSD－01覆土に由来すると考えられるAs-B軽石を包含している。

遺物所見　遺物はSD－01掘削後に層序区分を行わずに取り上げた。出土した遺物は少量で、床面より出土したものはなかった。出土した遺物には、土師器片28 gがある。そのうち土師器坏1点（1）を図化した。古墳時代中期後半に位置づけられる。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。出土遺物等から判断して、古墳時代中期以降に帰属するものと考えられる。

ＳＩ－12　（第17・34図）

平面形態　不明

規模　不明

主軸方位　不明

遺構所見　検出時の平面プランは耕作土直下で検出され、そのプランは明瞭であった。壁面は地山黒色土・ローム混土層が緩やかに立ち上がる。またその平面形態はまっすぐ走らず、やや湾曲する。床面は地山黒色土・ローム混土層で平坦に成形されるが、硬化面はなしていない。柱穴は確認されなかった。土坑が1基検出され、その覆土中より土師器坏1点（1）が出土した。燃焼施設および焼土は検出されなかった。覆土は自然堆積と想定される。

遺物所見　土坑覆土中より土師器坏1点（1）が出土した。砥石（2）が床面直上より出土した。出土した遺物は上記のみである。1は古墳時代中期後半に位置づけられる。

時期　本遺構の帰属時期の詳細は不明である。出土遺物等から判断して、古墳時代中期に位置付けられる可能性が高い。

ＳＴ－01　（第18・34図）

平面形態　長方形

規模　長軸3.96 m×短軸.26 m

主軸方位　N－57°－W

遺構所見　SD－02号溝下より検出された。おおむね平面長方形を基調としているが、壁面はまっすぐ走らず凹凸をなす。地山ローム層を掘り込んでおり、壁面はまっすぐ立ち上がる。床面は地山ローム層で成形されるが、凹凸が各所で認められる。竪穴内には柱穴状の掘り込みが4基検出された。覆土は黒色土を主体とし、自然堆積である。本遺構の埋没後にSD－02は掘削されている。

遺物所見　遺物は覆土中より少量出土した。出土した遺物は、土師器片10 g、須恵器片11 g、中近世土

器片 20 g である。そのうち図化に及んだものは、須恵器蓋 1 点（1）である。

時期　本遺構の帰属時期の詳細は不明である。出土遺物等から判断して、古代以降に位置付けられる。

ＳＴ－02　（第 19 図）

平面形態　隅丸長方形

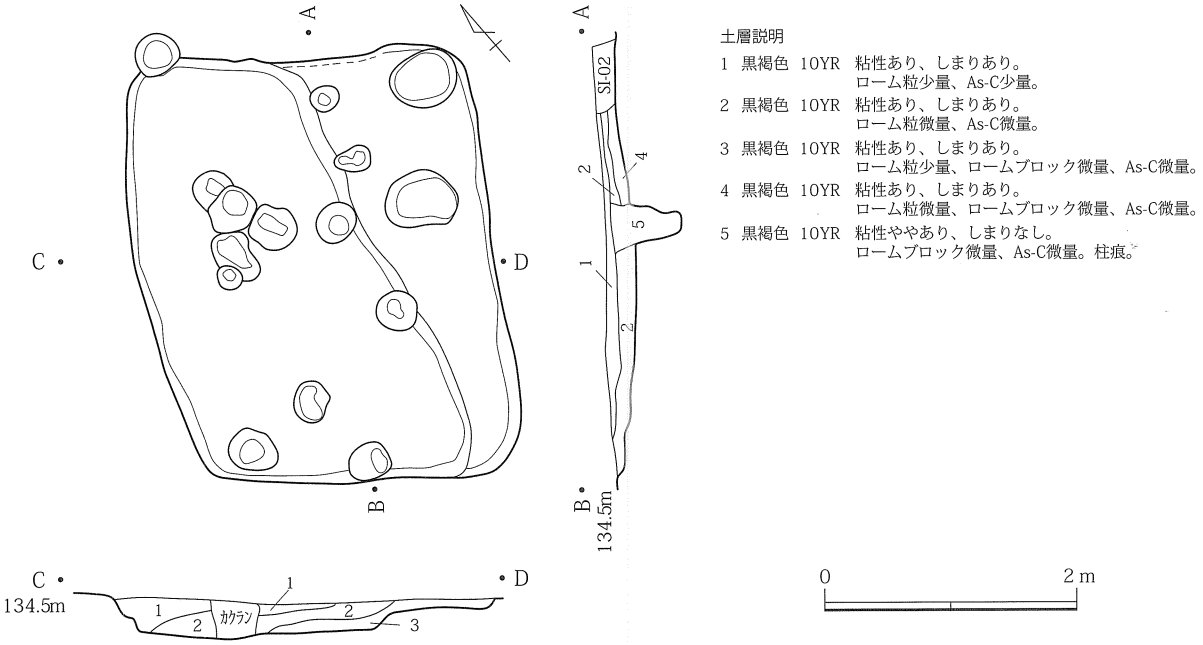
規模　長軸 4.30 m×短軸 2.54 m

主軸方位　N－59°－W

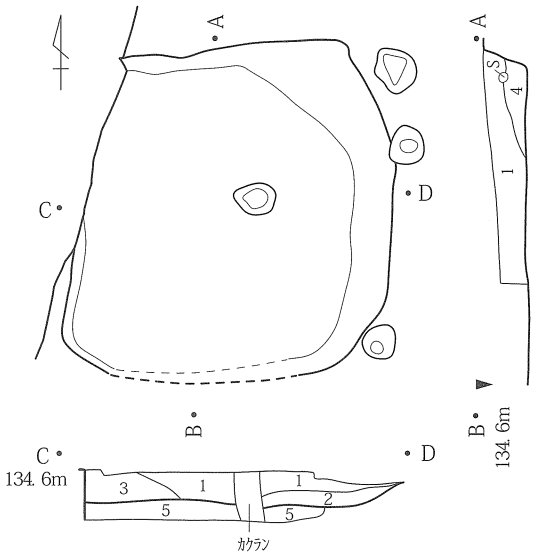
遺構所見　SD－02 号溝下より検出された。平面形態は不整な隅丸長方形を呈する。地山黒色土・ローム混土層を掘り込んでおり、壁面は不整形に上方へ立ち上がる。南側壁面は SD－02 により大きく損壊している。床面は地山ローム層で凹凸をなしながらほぼ水平になる。柱穴状の掘り込みが両端 2 ヶ所で検出された。本遺構の埋没後に SD－02 は掘削されている。

遺物所見　遺物は出土していない。

時期　本遺構の帰属時期は不明である。ST－01 と同時期の可能性が考えられ、古代以降の所産と推測される。



第８図　ＳＩ－01

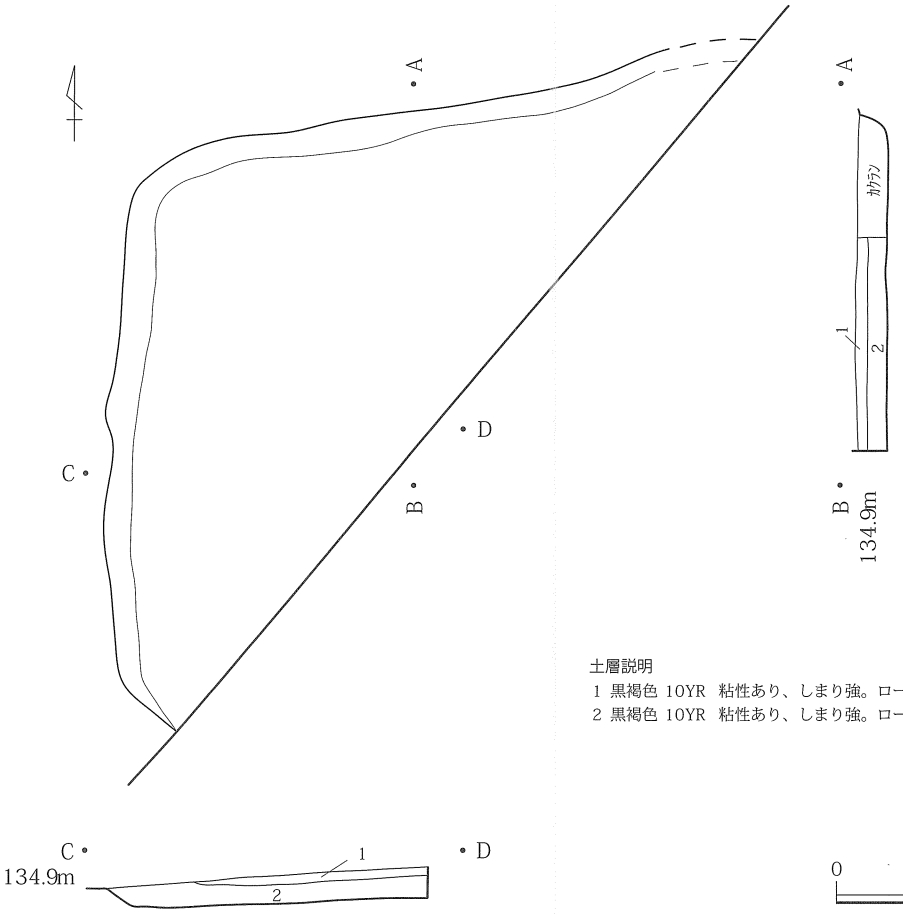


土層説明

1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、As-C微量。
3 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量。
4 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ロームブロック微量、As-C微量。
5 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ローム粒、ロームブロック微量。掘方。

0 2m

第9図　ＳＩ－02

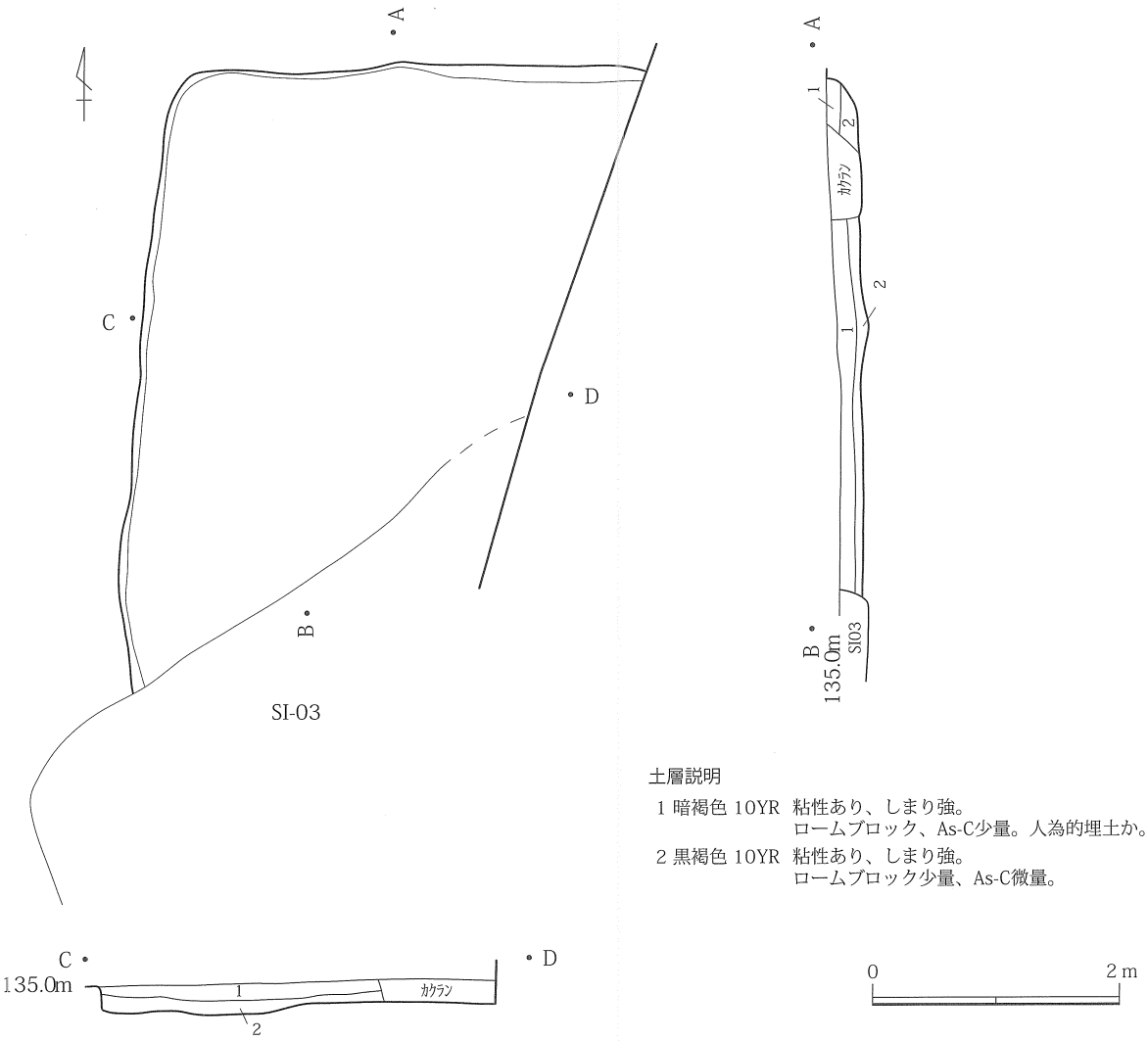


土層説明

1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまり強。ロームブロック、As-C少量。床面か。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまり強。ロームブロック少量、As-C微量。

0 2m

第10図　ＳＩ－03

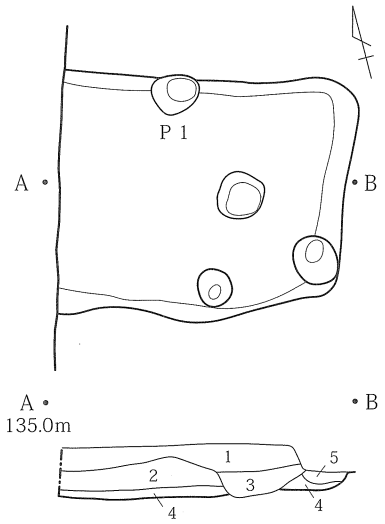


土層説明

1 暗褐色 10YR 粘性あり、しまり強。
ロームブロック、As-C少量。人為的埋土か。

2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまり強。
ロームブロック少量、As-C微量。

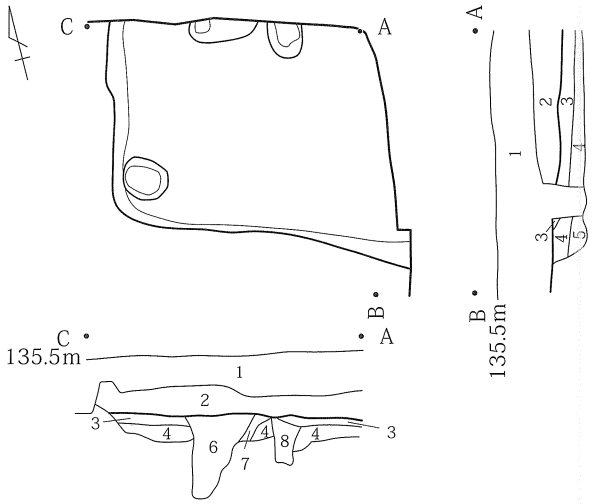
第 11 図　ＳＩ－04



土層説明

1 暗褐色 10YR 粘性あり、しまり強。ローム粒微量、AS-B微量。埋没後の覆土。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、AS-C微量。
3 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、ロームブロック微量。
4 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック。
5 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量。ピットか。

第 12 図　ＳＩ－07

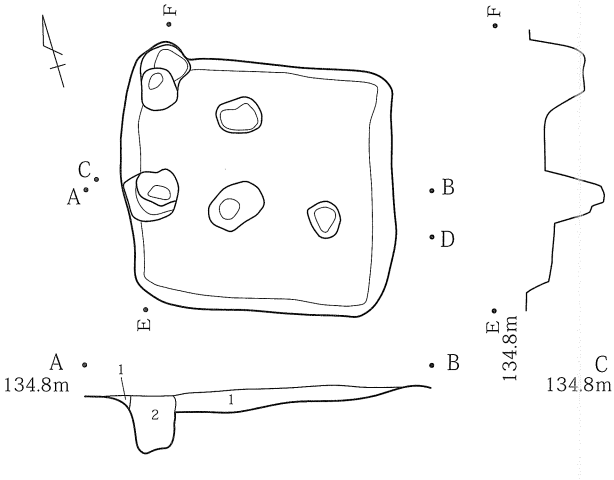


土層説明

1 黒褐色　10YR　粘性なし、しまりなし。
　　As-B、As-A。耕作土。
2 暗褐色　10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒微量。
3 黒褐色　10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒微量、As-C微量。
4 暗褐色　10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒少量、ロームブロック少量。
5 暗褐色　10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒、ロームブロック微量。
6 黒褐色　10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒微量、As-C微量。SK03覆土。
7 黒褐色　10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒微量、As-C微量。
8 黒褐色　10YR　粘性あり、しまりややあり。
　　ローム粒微量。柱痕。

0　2m

第13図　ＳＩ－08

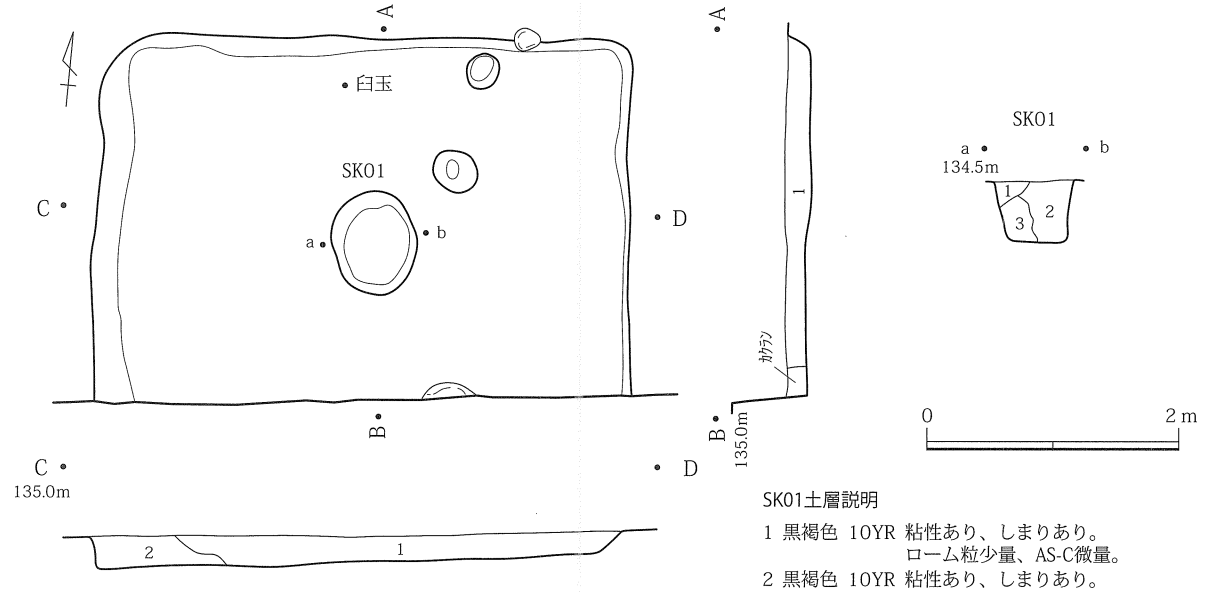


土層説明

1 黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、As-C。
2 黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒微量、ロームブロック少量、As-B微量。
　　ピット状の掘り込み。

0　2m

第14図　ＳＩ－09



土層説明

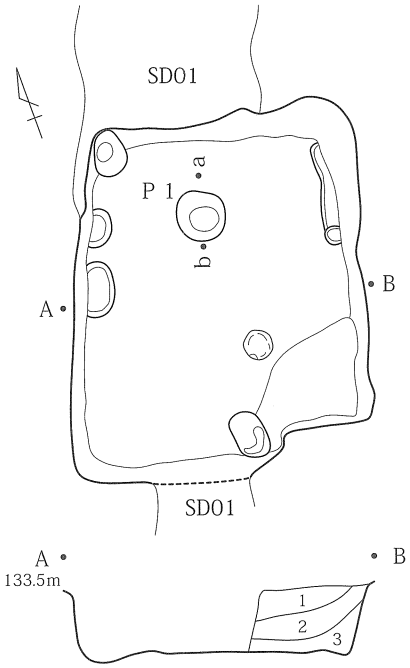
1 黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒少量、ロームブロック微量、As-C少量。
2 黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-C少量。

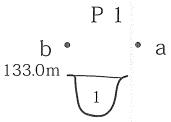
SK01土層説明

1 黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒少量、AS-C微量。
2 黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒少量、ロームブロック少量。
3 暗褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。
　　ローム粒少量、ロームブロック。

0　2m

第15図　ＳＩ－10





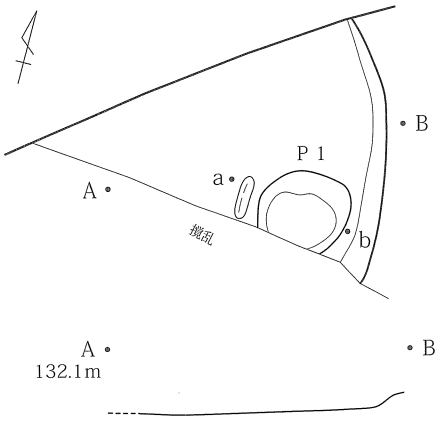
土層説明

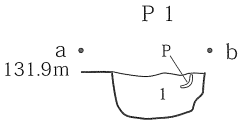
1 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック、As-B多量。SD01覆土。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-B。
3 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ロームブロック少量、As-B微量、φ1.0ｃｍパミス微量。

P1土層説明

1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-C微量、As-B。

第16図　ＳＩ－11

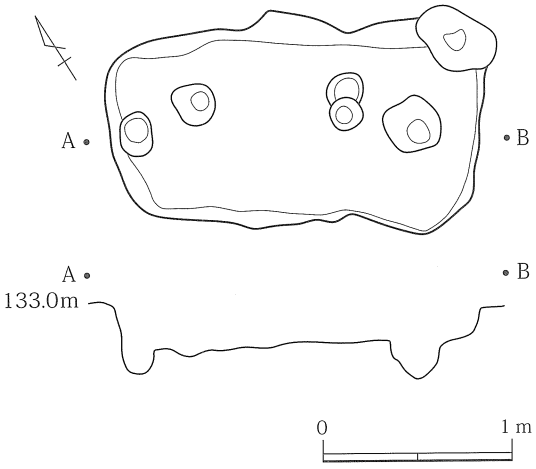




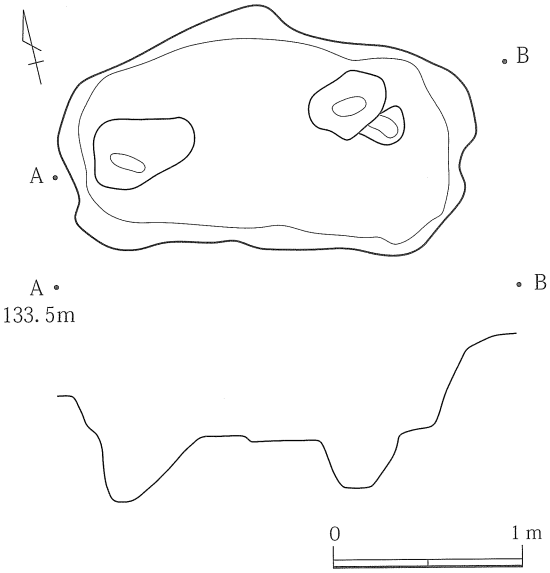
P1土層説明

1 黒褐色 10YR粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、φ1.0ｃｍパミス微量。

第17図　ＳＩ－12



第18図　ＳＴ－01



第19図　ＳＴ－02

3　基壇状遺構

ＳＸ－01　（ＳＩ－05・13・14）　（第20・34図）

平面形態　方形

規模　長軸15.6ｍ

主軸方位　Ｎ－７°－Ｅ

遺構所見　平面方形を呈する床面が３面検出された。それぞれ北からSI－14・SI－13・SI－05と呼称し調査を行った。床面はローム土と黒色土を版築状に固めているが、それぞれの高さは異なっている。それらは重複しておらず、それぞれ単独の床面として検出された。SI－05・14の床面はほぼ同一レベルで、SI－13の床面は１段低い位置にある。ただしSI－13床面上層は、わずかに硬化した黒色土が堆積していた。しかし、近現代における撹乱が激しく、かつ耕作土から漸移的に硬化していたためその硬化面の高さは明確には把握出来なかった。

掘り方において、SI－13・SI－14は東壁側を広く溝状に、北・南壁側を細い溝状に掘り込む。その形状は竪穴住居跡の掘り方に類似している。SI－05は、底面平坦に掘り込んでいる。これら掘り方は、重複しておらず、それぞれの掘り方間は土手状の高まりをもつ。壁際には柱穴が廻っているが、床面は掘り込まれておらず、柱穴掘り方の一部は床面下より検出された。なおSK－15（１号大形礫）は、床面を掘り込んでおり、土坑内からは大形の安山岩が検出された。しかし覆土にしまりのない黒色土が堆積しており、後世において廃棄されたものと判断される。

SI－05・13・14は東壁を共有していることから、一連の遺構であると判断される。その切り合い関係は層位的には判断できなかったが、掘り方の形状等からSI－13の増築としてSI－14・SI－05が構築されたものと考えられる。そのためSI－13床面上層の黒色土の硬化面はSI－05・14と同一レベルであった可能性が推測される。

周囲には後世において移動されたと判断される大形の礫が２点確認された（１号・２号大形礫）。おそらく本遺構と関連する可能性が推測されるが、どの位置に本来据えられていたものかは確認できなかった。

遺物所見　本遺構に伴うと判断される遺物は検出されなかった。掘り方内より土器片が出土しており、構築時期の下限が判断できる。ただし掘り方内出土の遺物からは、いずれもその出土状況から、埋納行為は認められなかった。

SI－05では、床面上層覆土内において土師器片88ｇ・縄文土器片７ｇ出土し、掘り方において土師器片25ｇ・須恵器片24ｇ・縄文土器片19ｇ出土している。SI－13では、床面上層覆土内において土師器片216ｇ・須恵器片91ｇ・中近世土器片72ｇ出土し、掘り方において土師器片482ｇ・須恵器片31ｇ・縄文土器片５ｇ・弥生土器片15ｇ出土している。SI－14では、床面上層覆土内において土師器片151ｇ・須恵器片64ｇ・中近世土器片２ｇ出土し、掘り方において土師器片97ｇ・須恵器片77ｇ出土している。そのうち図化に及んだものは、床面上層から出土したものとして、５（SI－13出土）・８（SI－14出土）がある。そして掘り方から出土したものとして１・２・３・４（SI－13出土）、６・７（SI－14出土）がある。床面直上からは５の他にも陶磁器片が出土している。しかし、撹乱も多いためそれに伴う可能性が指摘される。掘り方出土土器片の中で下限を示すものは、１・２・３・４・６・７の土器群である。これらはいずれも小破片で、混入と判断されるが、７世紀後半段階のものを主体としている。

時期　掘り方出土の遺物の下限は、７世紀後半段階であり、本遺構は古代以降に帰属すると判断される。

SK02
SK15
SI－14
SI－13
SI－05
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
トーンは床面範囲
その他は掘り方実測図
0
2m
135.0m
カクラン
A－B土層説明
1 暗褐色 10YR 粘性あり、しまり強。ロームブロック多量。黒色土とロームの版築。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック。埋土（版築なし）。
C－D，I－J土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、ロームブロック。覆土。
2 暗褐色 10YR 粘性あり、しまり強。ロームブロック多量。ロームと黒色土の版築。
3 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまり強。ロームブロック多量。ロームと黒色土の版築、2層よりしまりなし。
4 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、ロームブロック。埋土。
E－F土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。AS-B、AS-A。耕作土。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック少量、AS-B微量。
3 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまり強。ロームブロック。ロームと黒色土の版築。
4 暗褐色 7.5YR 粘性あり、しまり強。ロームブロック。ロームと黒色土の版築、3層よりしまりなし。
5 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量。埋土。

第20図　ＳＸ－01

4　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は現状で３棟検出されている。その他にも掘立柱建物跡の一部を構成する可能性が考えられるピットが複数検出されたが、調査区の制限により柱穴構成が確定できなかった。とくに調査中に設定したSB－01･SB－02号掘立柱建物跡は、建物跡の柱穴と判断されるが、明確な建物跡の構成は把握できなかった（第28図）。

掘立柱建物跡は調査区東側（１区）に集中して検出された。その他の２・３区においてもピットは検出されたものの、掘立柱建物跡を構成するような柱穴は検出されなかった。また掘り方を有するピットも確認されていない。

掘立柱建物跡はいずれも現状においては、側柱建物である。ただし調査区外の状況によっては、その構成が変わる可能性はある。柱穴の平面形態は、SB－03・SB－05号掘立柱建物跡では方形基調を呈し、SB－04では小形の円形を呈する。

確認された掘立柱建物跡どうしに切り合い関係は認められなかった。また他の遺構、とくに１区北側の竪穴状遺構および基壇状遺構（SX－01）とは切り合っていない。さらにそれらとはある程度の距離をおいて構築されていることや、とくに基壇状遺構（SX－01）とは主軸方位が近似することから両者が同時期に存在した可能性が考えられる。

ＳＢ－03　（第21図）

規模　（１間×２間）

主軸方位　真北

遺構所見　現状では１間×２間の柱穴が確認されているが、西側は調査区外となっており、さらに柱穴が広がる可能性がある。Ｐ１・Ｐ４では柱根が確認された。とくにＰ４は最も深く、段掘り状の掘り方中央に直径35cmの柱根が認められた。その他の柱穴においては、平面検出・断面観察においても柱根は検出されなかった。柱穴の平面形態は、Ｐ２・Ｐ４は方形基調であった。断面形態は、Ｐ４以外の柱穴は逆台形状を呈する。柱抜き取り痕は、いずれの柱穴においても認められなかった。Ｐ３は本遺構に関連する柱穴か。柱根状の掘り込みが確認された。

遺物所見　遺物は出土していない。

備考　Ｐ４は調査時のSK－05、Ｐ５は調査時のＰ19からの振り替え。

ＳＢ－04　（第22図）

規模　２間×２間

主軸方位　真北

遺構所見　現状で２間×２間が確認されている。南東隅の柱穴は、調査区外で確認される可能性が高い。Ｐ４では柱抜き取り痕が確認された。Ｐ４以外では覆土はほぼ単層で、平面検出および断面観察においても柱根は認められなかった。柱穴の平面形態はいずれも円形基調を呈する。断面形態は、逆台形もしくは逆三角形で、段掘り状になるものはなかった。

遺物所見　遺物は出土していない。

ＳＢ－05（第21・34図）

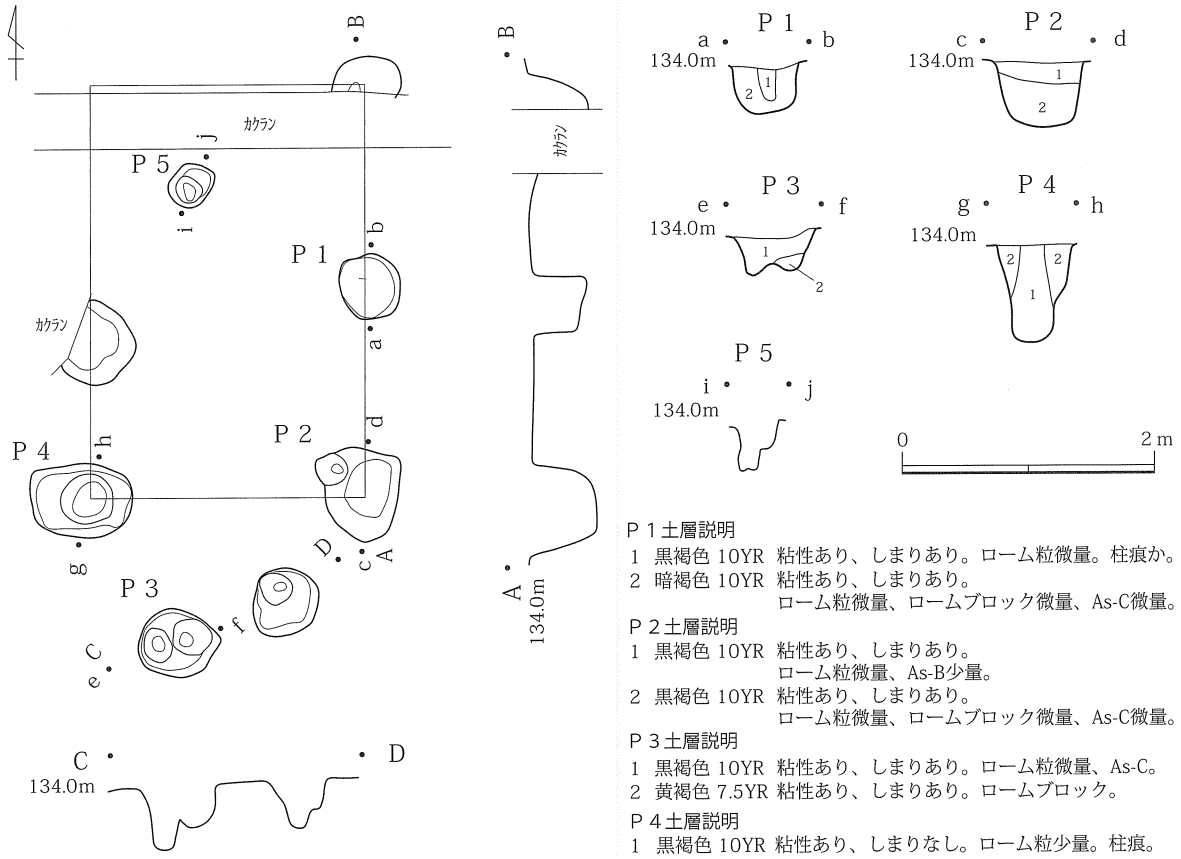
規模　（１間×１間）

主軸方位　Ｎ－10°－Ｅ

遺構所見　現状で１間×１間が確認されているが、調査区北東端で検出されたため、調査区外で柱穴が確認される可能性がある。柱穴の平面形態は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３は、方形基調を呈する。柱穴断面は、方形もしくは逆台形状を呈している。柱根は平面検出および断面観察においても確認されなかった。

遺物所見　Ｐ１からは土師器片59g、Ｐ２からは土師器片63g、Ｐ４からは土師器片30g・須恵器片116g・中近世土器片17gが出土している。そのうち図化に及んだものは、Ｐ４出土の須恵器１点（１）である。

備考　Ｐ１は調査時のSK－01、Ｐ２は調査時のSK－02、Ｐ３は調査時のSK－03、Ｐ４は調査時のSK－12からの振り替えである。



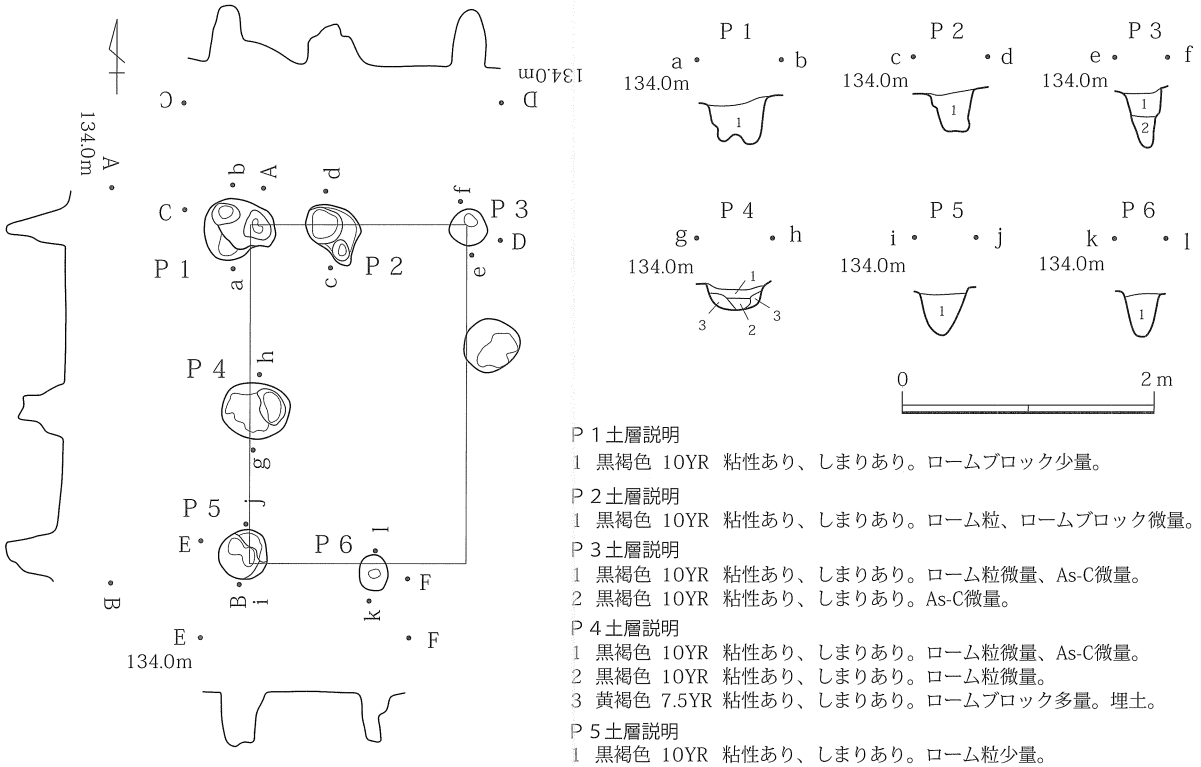
Ｐ１土層説明
1　黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。ローム粒微量。柱痕か。
2　暗褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。
ローム粒微量、ロームブロック微量、As-C微量。

Ｐ２土層説明
1　黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。
ローム粒微量、As-B少量。
2　黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。
ローム粒微量、ロームブロック微量、As-C微量。

Ｐ３土層説明
1　黒褐色 10YR　粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-C。
2　黄褐色 7.5YR　粘性あり、しまりあり。ロームブロック。

Ｐ４土層説明
1　黒褐色 10YR　粘性あり、しまりなし。ローム粒少量。柱痕。
2　暗褐色 10YR　粘性あり、しまり強。
ロームブロック多量、As-C微量。

第21図　ＳＢ－03



P１土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック少量。

P２土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、ロームブロック微量。

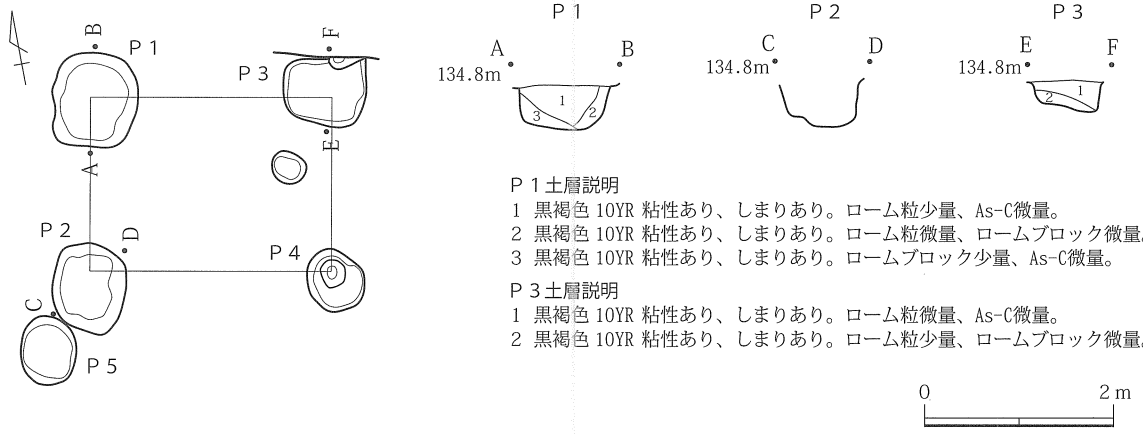
P３土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-C微量。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。As-C微量。

P４土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-C微量。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量。
3 黄褐色 7.5YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量。埋土。

P５土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量。

P６土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。As-C。

第22図　ＳＢ－04



P１土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、As-C微量。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、ロームブロック微量。
3 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック少量、As-C微量。

P３土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-C微量。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、ロームブロック微量。

第23図　ＳＢ－05

5　溝

溝は4条検出された。いずれも調査区西側に集中している。切り合い関係が認められたのは、SD－02とSD－03でSD－03→SD－02の構築順が確認できた。溝の集中する調査区西側の遺構上層堆積土は、粘性を強く帯びているが、これは溝に起因するものと判断される。4条の溝のうちSD－01・SD－03は区画溝の可能性が想定される。SD－03は最大幅3.5 mを計測する大形の溝で、南北にのびている。その端は確認できなかったが、地形図からみると、南北両側から等高線がわずかに入り込んでおり、この丘陵を横断するように走っている可能性が推測される。

ＳＤ－01　（第24・34図）

規模　幅1.5 m　深さ0.64 m

遺構所見　ほぼ南北方向にまっすぐ走行する溝である。北から南へ向かって傾斜するが、流水の痕跡は認められなかった。その断面形状は逆台形状を呈する。覆土は自然堆積と推定され、As-B軽石を包含する。主に東方向から流入した状況がみられる。SI－11と切り合っており、SI－11→SD－01の先後関係をなす。

遺物　遺物は小片が覆土中より出土したのみである。出土した遺物は、土師器片31 gである。そのうち図化に及んだものは、土師器坏1点（1）である。

時期　直接的に時期を示すものはないが、出土遺物や覆土の状況から古代以降のものと判断される。

ＳＤ－02　（第25・34図）

規模　最大幅2.2 m　深さ0.32 m

遺構所見　南東方向から北西方向へ向かって走る溝である。南東から北西へ向かって傾斜している。北西端はSD－03溝内におさまっており、窪地となっていたSD－03内へ排水させたものと推測される。地形上では大きく北から南へ傾斜しており、本溝はそれに逆流するように掘削されている。おそらくそれ以前に掘削されたST－01・ST－02（竪穴状遺構）そしてSD－03によってこの一帯が周辺より低くなっていたと推測される。その証左として、遺構覆土およびその上層部分は粘性を強く帯びており、滞水していた状態が推定された。

断面形状は、東側が深く掘り込まれ、西に向かって緩やかに立ち上がっていく。覆土は自然堆積で、東西両方向から流入している。

遺物所見　遺物は覆土中より少量出土している。出土した遺物は、土師器片178 g・須恵器片189 g・中近世土器片275 g・縄文土器片8 gである。図化に及んだ遺物は常滑大甕1点（1）である。

時期　SD－03覆土中のAs-B軽石を切っているなど、中世以降の遺構である可能性が考えられる。

ＳＤ－03　（第27・35図）

規模　最大幅3.5 m　深さ1.20 m

遺構所見　調査区により調査範囲は南北に分割された。北側を「北区」、南側を「南区」として、遺物取り上げを行っている。

本溝は、南北に走る溝である。北から南へ向かって傾斜するが、流水の痕跡は認められなかった。断面形状は、上方から碗形に掘り込まれ、下位に至ってまっすぐ掘り下げられる。底面はほぼ平坦であるが、中央部分がわずかに凹む。壁面には柱穴掘り方が掘削されるが、とくに西壁に多く認められるという特徴がある。

北端部において東壁・西壁に相対するように刳り込みが設けられているのが確認された。壁面中位から下

端近くまでまっすぐに掘り込まれている。刳り込みの直下からは柱穴は検出されなかった。矢板状のものを設けたか否かは判断できなかった。覆土は自然堆積と想定される。ロームを顕著に包含する土層は認められず、溝周囲に土手状施設といったものは推測されなかった。覆土上層にはAs-B軽石が堆積しており、その降下によって本溝は完全に埋没した状況が認められた。As-B軽石の堆積は、溝の東側に寄っており、大きくは西から覆土が流入していった状況が窺えた。

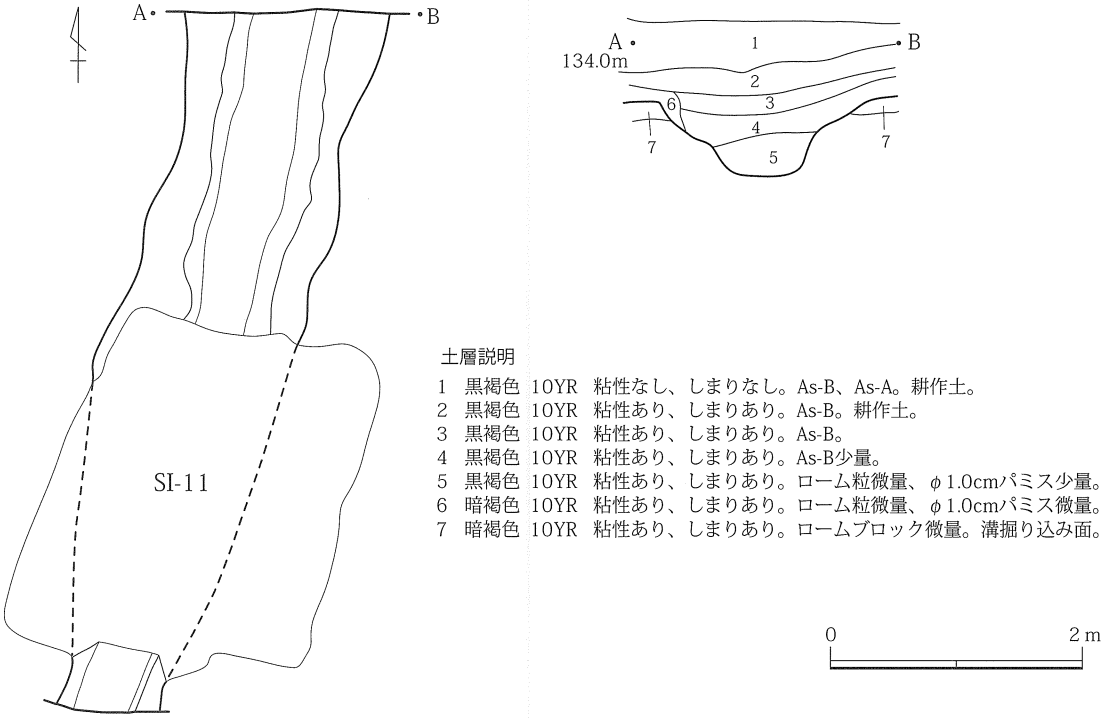
遺物所見　遺物は覆土中から多く出土した。小片が多く、その出土状況からも周囲からの混入と判断される。出土した遺物は、土師器片2531 g・須恵器片1621 g・中近世土器片130 g・縄文土器片148 gである。そのうち図化に及んだ遺物は、9点ある。1は縄文土器か。2は韓式系土器で、溝南側覆土中から出土している。4は土師器小形甕で、溝北側底面直上より出土している。古墳時代後期に位置づけられる。また、As-B軽石層より上層では、9などの中世以降の土器・陶磁器片も出土している。

ＳＤ－04　（第26図）

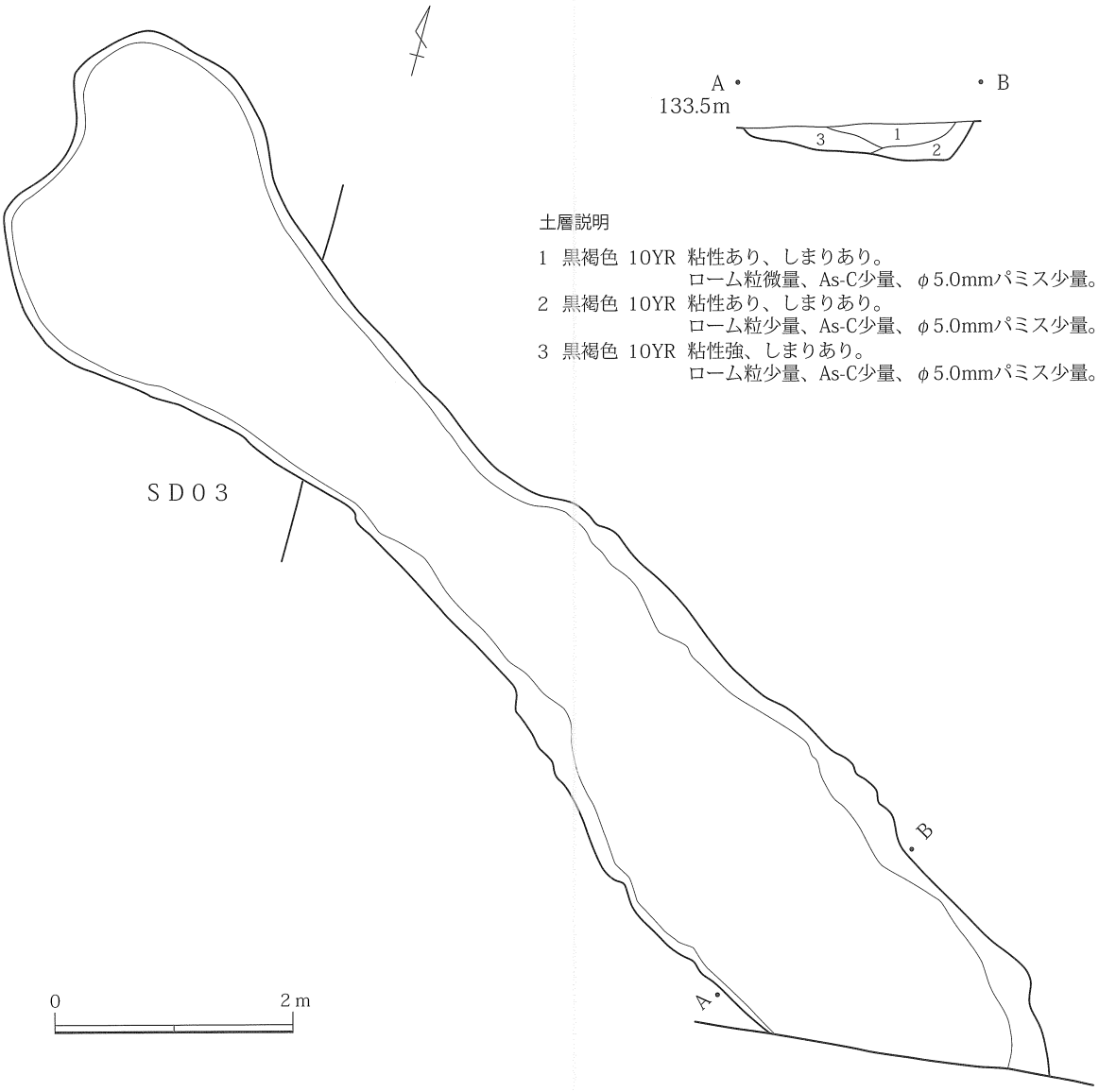
規模　幅0.46 m　深さ0.1 m

遺構所見　北西から南東方向へ向かって走り、端部は土坑状の掘り込みに至る。顕著な流水の痕跡は認められなかった。覆土は単層である。遺構の性格については不明である。

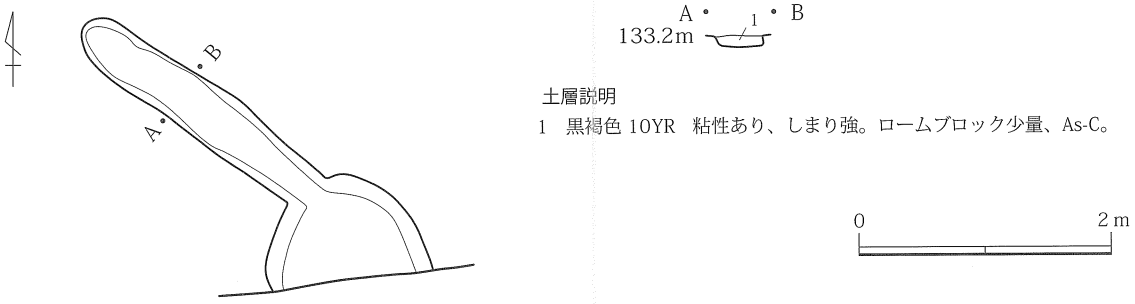
遺物所見　出土した遺物はない。



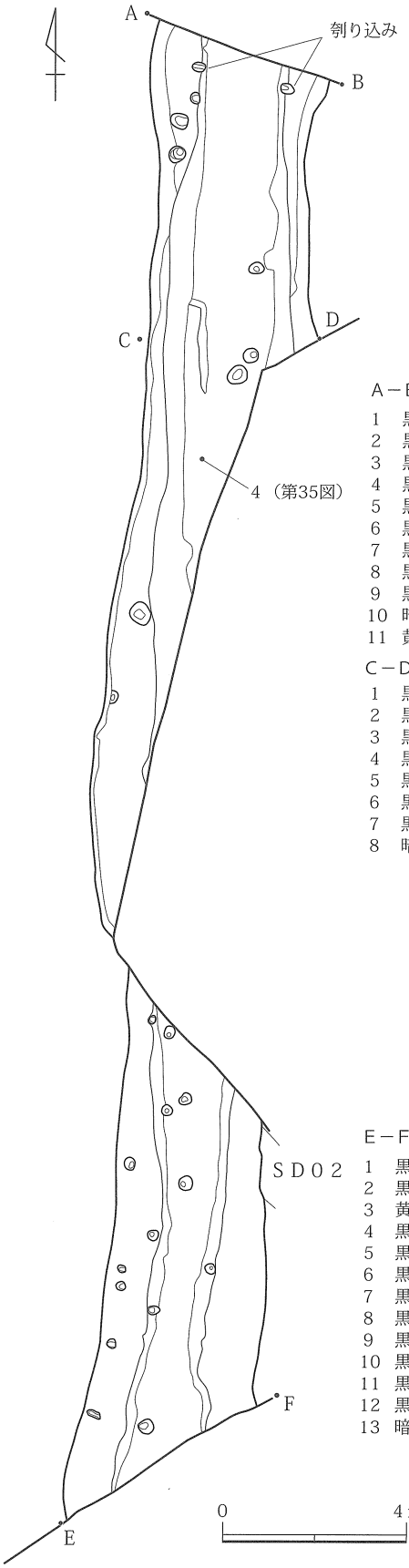
第24図　ＳＤ－01

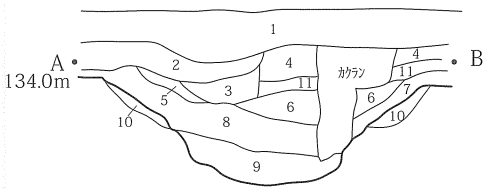


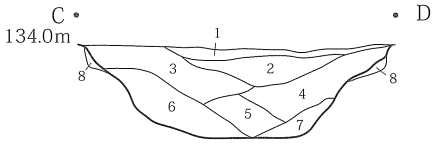
第25図　SD－02



第26図　SD－04





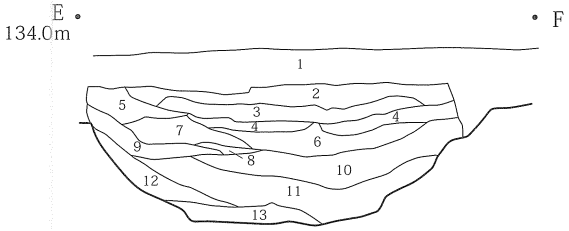


Ａ－Ｂ土層説明

1	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。As-B、As-C。耕作土。
2	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。As-B、As-A少量。掘り込み。
3	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。As-B、As-A微量。掘り込み。
4	黒褐色	10YR	粘性なし、しまりなし。As-B多量。As-B２次堆積。
5	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。As-B少量。
6	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス少量。
7	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス微量。
8	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ1.0cm褐色パミス少量。
9	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ1.0cm褐色パミス。
10	暗褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量。溝壁面。
11	黄褐色	7.5YR	粘性なし、しまりなし。As-B１次堆積。

Ｃ－Ｄ土層説明

1	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。As-B多量。
2	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス少量。
3	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ1.0ｃｍ褐色パミス。
4	黒褐色	10YR	粘性強、しまりあり。φ1.0mm褐色パミス。
5	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ1.0mmパミス微量、φ5.0mm褐色パミス。
6	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ1.0mm褐色パミス多量。
7	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス微量。
8	暗褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス少量。溝壁面。



Ｅ－Ｆ土層説明

1	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。As-B、As-A。耕作土。
2	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。As-B多量、As-A微量。耕作土。
3	黄褐色	7.5YR	粘性なし、しまりなし。As-B多量。As-B１次堆積。
4	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-B微量。
5	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-B微量。
6	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス少量。
7	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス、φ1.0cm褐色パミス微量。
8	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ3.0mm褐色パミス微量。
9	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス、φ1.0cm褐色パミス微量。
10	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス、φ1.0cm褐色パミス微量。
11	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。φ5.0mm褐色パミス、φ1.0cm褐色パミス微量。
12	黒褐色	10YR	粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、ロームブロック微量。
13	暗褐色	7.5YR	粘性あり、しまりあり。ロームブロック。

0　2 m

第27図　ＳＤ－03

6　土坑・ピット

概要　土坑・ピットが104基検出された。人為的掘り込みと判断されたものについては、土坑・ピット番号を付したが、それ以外のものについては番号を付けていない。土坑とピットの区別は、平面検出時において直径50cmを目安としてそれ以上のものを土坑、それ未満のものをピットとした。掘削過程においてその規模が大きく変わったものもあったが、混乱を避けるため遺構名称は継続した。

土坑・ピットは、おもに1区南側・2区西側・3区南側で多く検出されており、以下それぞれの概要を述べていく。

1区南側（第28図）　1区南側では、前項で述べたように掘立柱建物跡が確認されている。この一帯で検出された土坑・ピットの中には、調査区内においてその構造が把握できなかったが掘立柱建物を構成する可能性のあるものもある。

SB－01-P1・P2は直線的に並び、平面円形のピットである。とくにSB－01-P1は、柱痕を有する。SB－02-P1・P2は北西－南東方向に直線的に並び、平面方形を基調とする。なおSB－01・SB－02は、調査時には掘立柱建物跡としたが、明確な建物構成が把握できなかったため、現状では欠番とし本項で報告した。また周辺にはP 13・P 14のように断面段掘り状で深度のある柱穴もある。いずれも建物跡の柱穴と判断されるが、その構造は明らかに出来なかった。

P 08は平面円形を呈し、その断面は段掘り状になり、木柱が据えられていた痕跡を残す。その規模は大形であり、建物跡の柱穴と推定されるが、周囲に同規模の柱穴が確認できなかったことから建物の構造については明らかにできなかった。

2区西側（第29図）　2区西側では、SD－01溝の東側において土坑・ピットが多く検出された。土坑の多くは、植栽による撹乱であり、As-A軽石を多く包含していた。

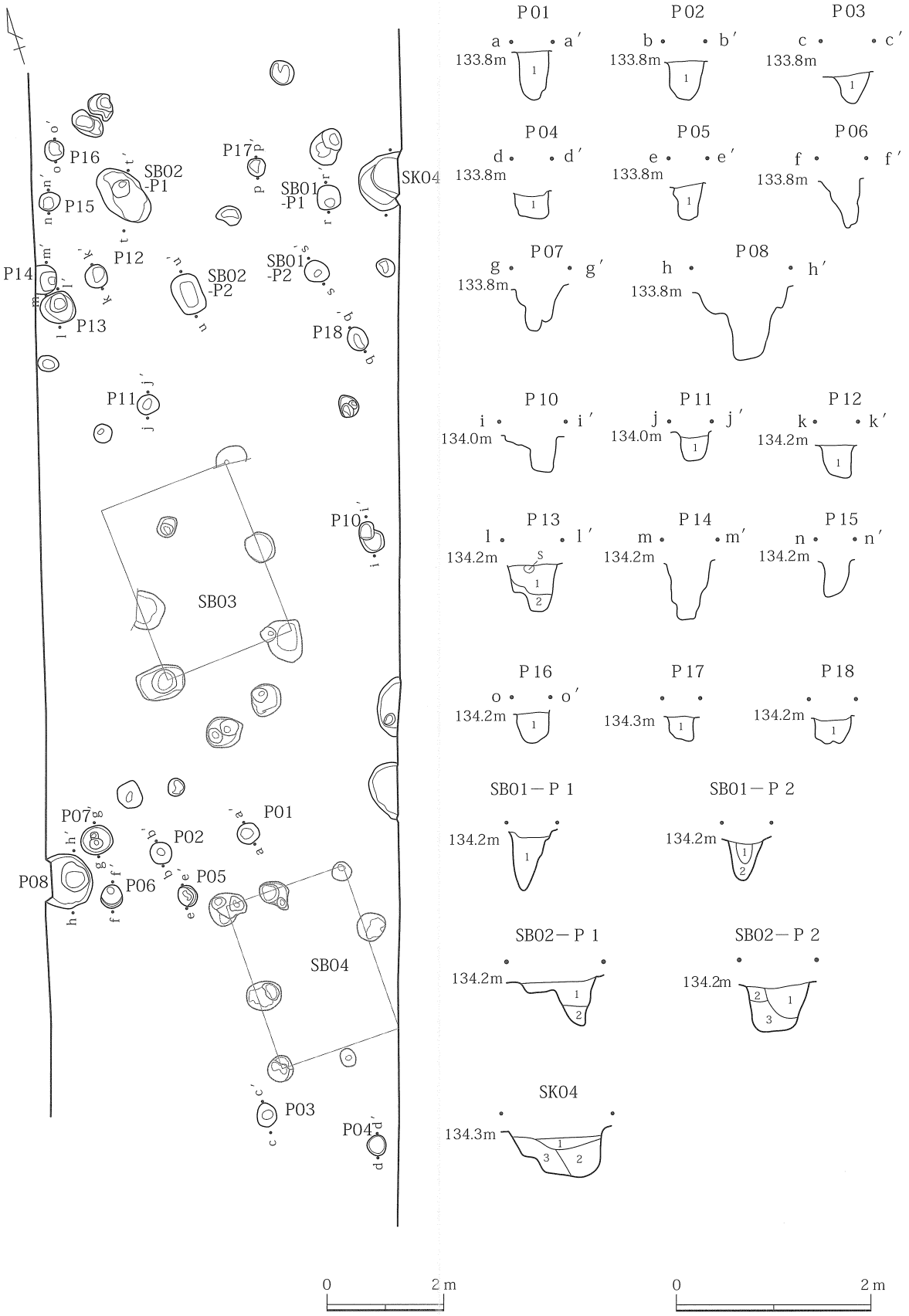
建物跡を構成するような柱穴は確認できなかったが、P 21・P 22・P 23・P 24はある程度直線的に並んでおり、柵列の可能性が考えられる。またその断面形状からいずれも斜位に木杭を打ち込んだ状況が看取された。またP 21・P 22・P 23・P 24は北西－南東方向に並んでおり、すぐ西を走行するSD－01号溝には並行せず、SD－02号溝に並行する。

なお2区東側でも、少数のピット・土坑が検出されているが、とくに土坑については植栽の抜き取り痕と判断され、その覆土にはAs-A軽石を多く包含していた。

3区南側（第30図）　3区では南側を中心にピットが検出された。3区ではSD－03号溝が南北に走っているが、それからはおおよそ3m程度離れた位置でピットが確認されており、明確にSD－03号溝と関連すると判断されるものは確認できなかった。

明確に建物跡が想定されるピットの配列は認められなかった。ただし、木杭を設置したと想定される断面段掘り状のピットが多く確認されている。またP 32のように深さが1mを超えるものも認められた。

なお3区北側でも少数のピットが検出されているが、いずれもその掘り方は非常に浅かった。



第 28 図　1 区南側土坑・ピット群（1）

P01土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。As-C微量。

P02土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ロームブロック微量、As-C微量。

P03土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ローム粒微量、As-C少量。

P04土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量。

P05土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ロームブロック微量、As-B微量。

P07土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ロームブロック微量、φ5.0mmパミス少量。

P11土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。φ5.0mmパミス少量。

P12土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-B。

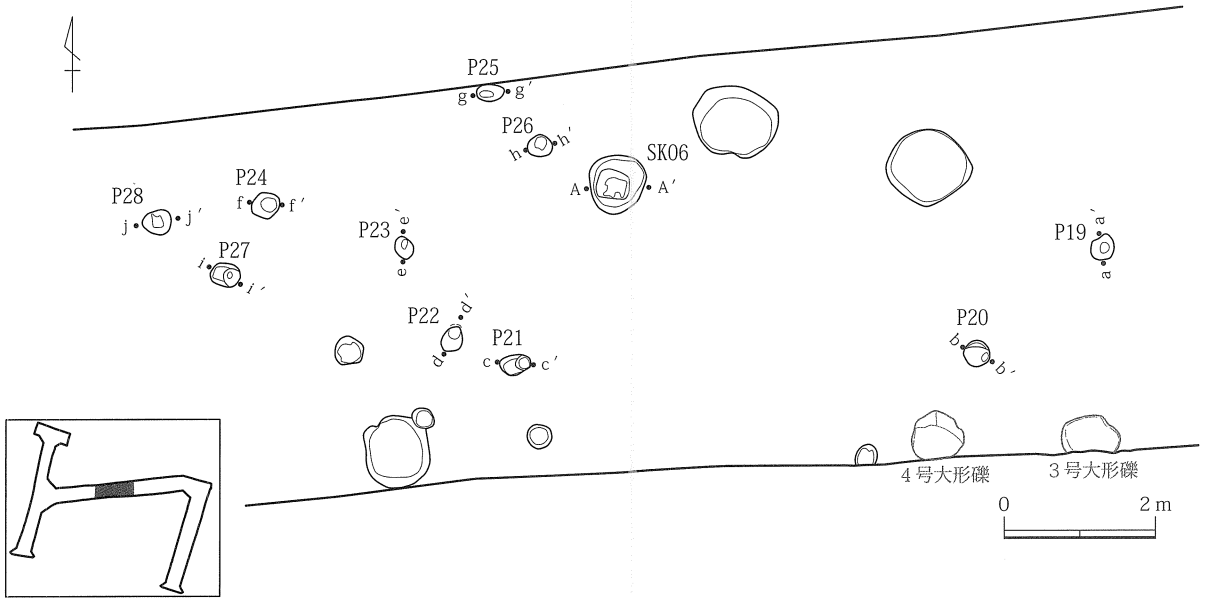
P13土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。As-B、φ5.0mmパミス少量。
2 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック。

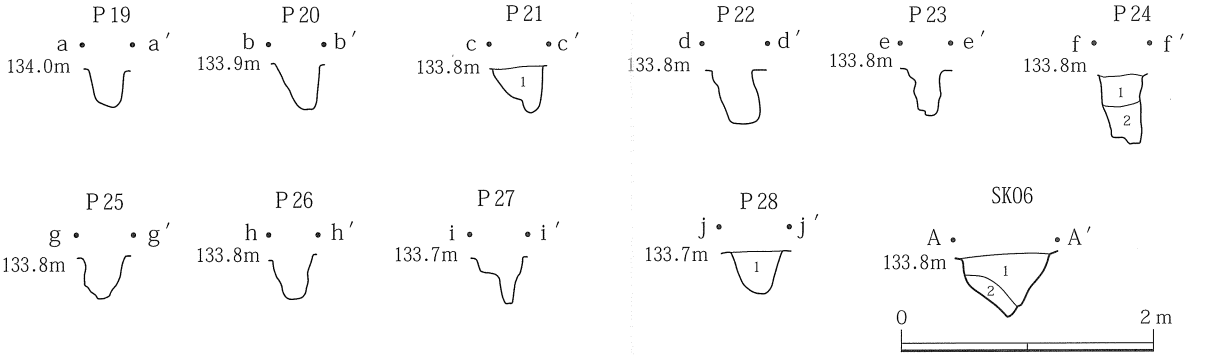
P16土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。As-B。

P17土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量。

P18土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ロームブロック微量。

第29図　1区南側土坑・ピット群（2）





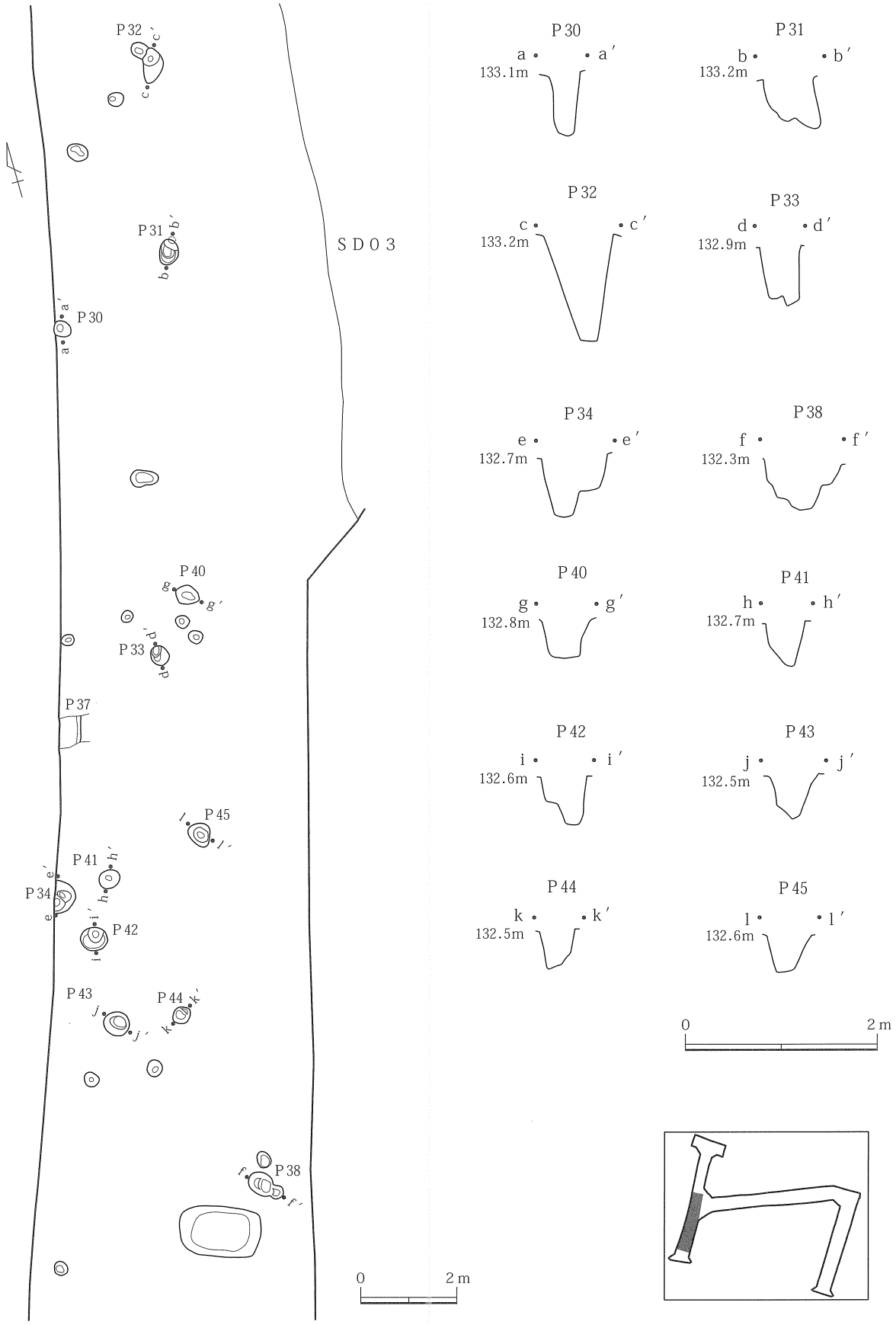
P21土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量、As-C微量。

P24土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりなし。ローム粒微量、As-B。
2 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒微量。

P28土層説明
1 黒褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒少量、As-C微量。

SK06土層説明
1 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。ローム粒、As-C。
2 暗褐色 10YR 粘性あり、しまりあり。
ローム粒少量、ロームブロック。

第30図　2区西側土坑・ピット群



第31図　3区南側土坑・ピット群

7　大形礫

調査区内において携行不可能な大形の礫が４点検出された。１号・２号大形礫は土坑内から出土し、３・４号大形礫は単独で検出された。

１号大形礫　（第 32 図）

１区基壇状遺構（SX － 01）の床面を掘り込む土坑内より大形礫が出土している（調査時には SK － 15）。長さ 104cm・幅 50cm・厚さ 63cm を計測する。安山岩。とくに目立った加工痕は認められなかった。土坑内にはしまりのない As-B 軽石を包含する覆土が堆積しており、土坑掘削後に投棄されたものと考えられる。

２号大形礫　（第 32 図）

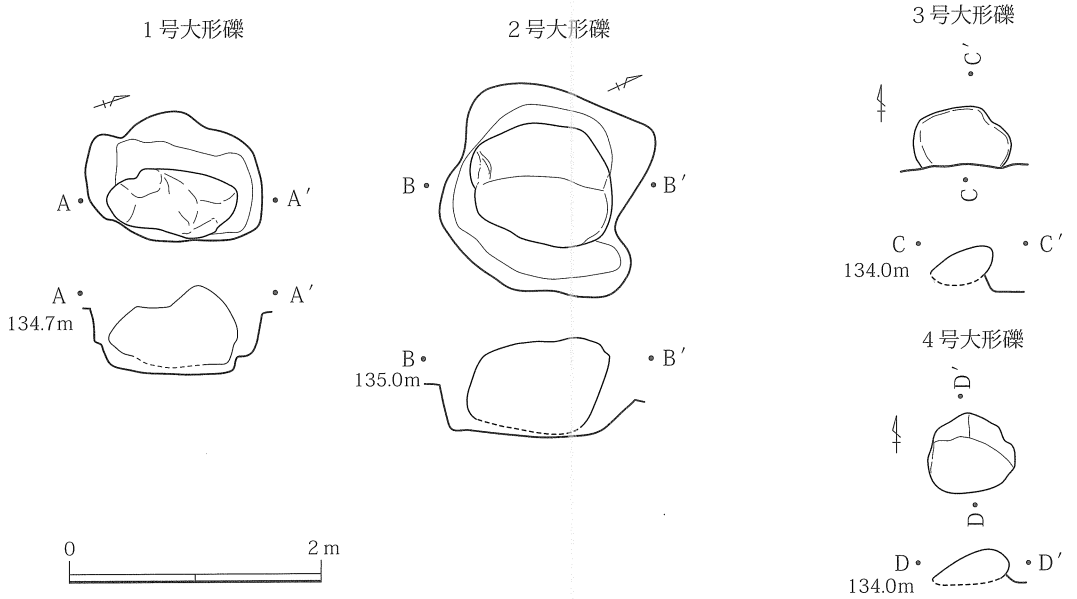
１区１号大形礫の西側で検出された。検出時には礫は露出していたが、土坑に伴うことが分かった。長さ 116cm・幅 95cm・厚さ（80cm）を計測する。角閃石安山岩。表面には刃物状の工具痕が広く認められた。土坑内にはしまりのない As-B 軽石を包含する覆土が堆積しており、土坑掘削後に投棄されたものと考えられる。

３号大形礫　（第 32 図）

２区中央で４号大形礫と並列して検出された。土坑およびその他遺構には伴っていない。長さ 78cm・厚さ（26cm）を計測する。凝灰岩。工具痕は認められなかった。農耕用トレンチャーが大形礫直前で止まっていることから、近現代におけるものではないと判断される。

４号大形礫　（第 32 図）

２区中央で３号大形礫と並列して検出された。土坑およびその他の遺構には伴っていない。長さ 74cm・幅 69cm・厚さ（26cm）を計測する。角閃石安山岩。工具痕は認められなかった。３号大形礫と同様、農耕用トレンチャーが大形礫直前で止まっていることから、近現代におけるものではないと判断される。



第 32 図　大形礫

8　出土した遺物の概要　（第33～37図）

図化に及んだ遺物は、土器50点、埴輪1点、石器・石製品6点、鉄製品2点である。出土状況から判断して、遺構に伴うと判断されるものは、SI-10－3とSI-12－1・2だけである。その他の遺物については、当該遺構におけるおおよその時期を示すために、上限を示すもの・主体となる時期を示すもの・下限を示すものの3者を選択し、掲載した。そのため小破片においても時期が分かるものについては図化に及んだ。

遺跡全体において主体となる遺物は、7世紀後半から8世紀に比定される土師器である。その他、縄文土器・弥生土器が少量出土し、古墳時代においては前期のものが1点（未掲載）で、中期のものが比較的多く出土している。近世以降の遺物も少なくなく、とくに1区北側で多く出土した。

遺物の出土状況は、SI-10－3の臼玉が床面より、SI-12－1の土師器坏がピット覆土中、2の砥石が床面より出土している。その他の遺物については、混入と判断されるもので遺棄された状況のものはなかった。

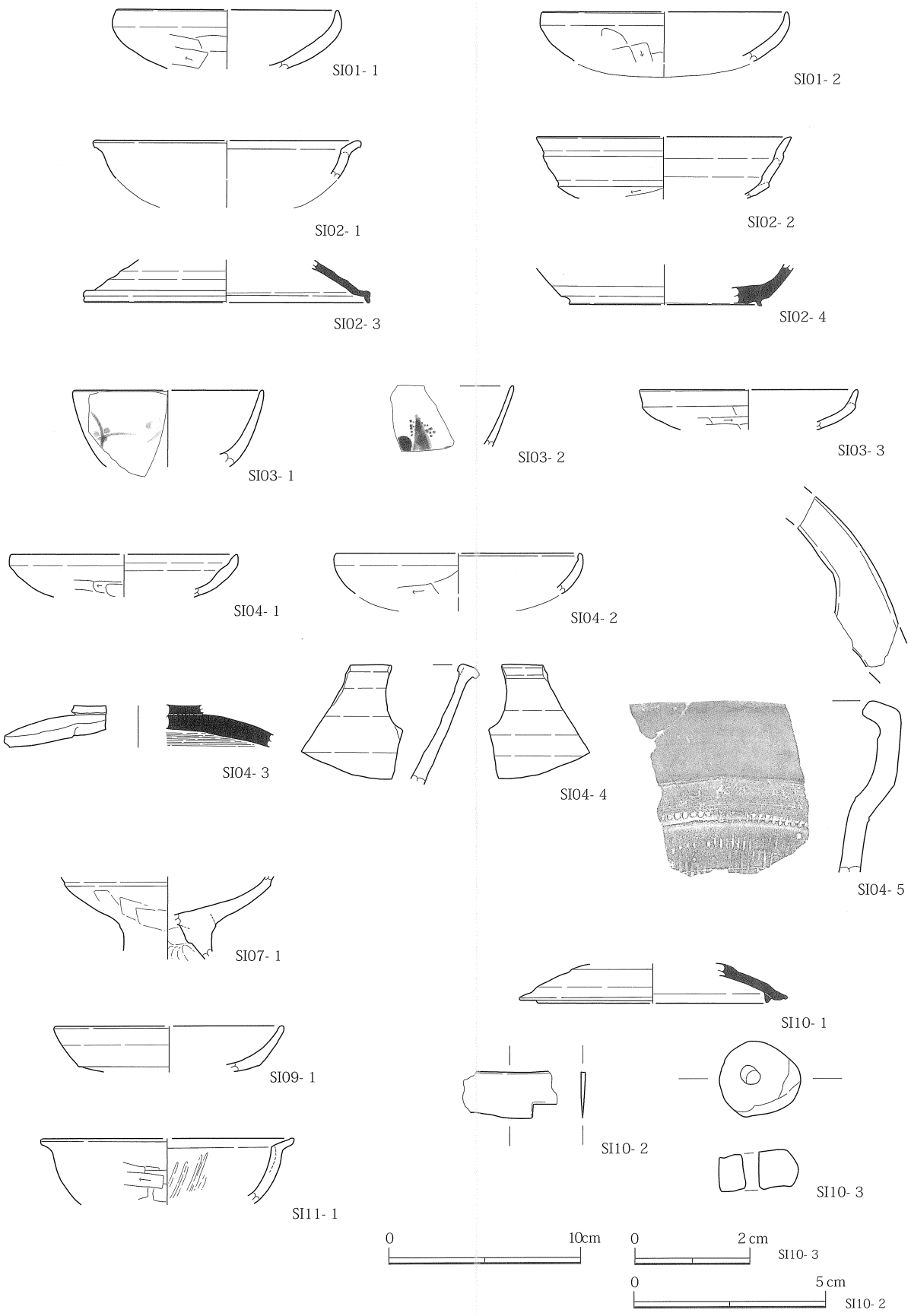
縄文時代の遺物は、土器片および石器がある。土器片は、前期黒浜式（遺構外－6・7）、後期堀之内式（遺構外－8・9）である。石器は打製石斧が2点出土している。本調査地点においては、縄文時代に帰属する可能性のある遺構は確認されておらず、出土した遺物もいずれも遺構外もしくは覆土中に混入したものである。

弥生時代の遺物は、櫛描波状文を施す土器片（SX-01－4）が1点掘り方覆土中より出土した。弥生土器片は小破片においてもこの1点に止まる。

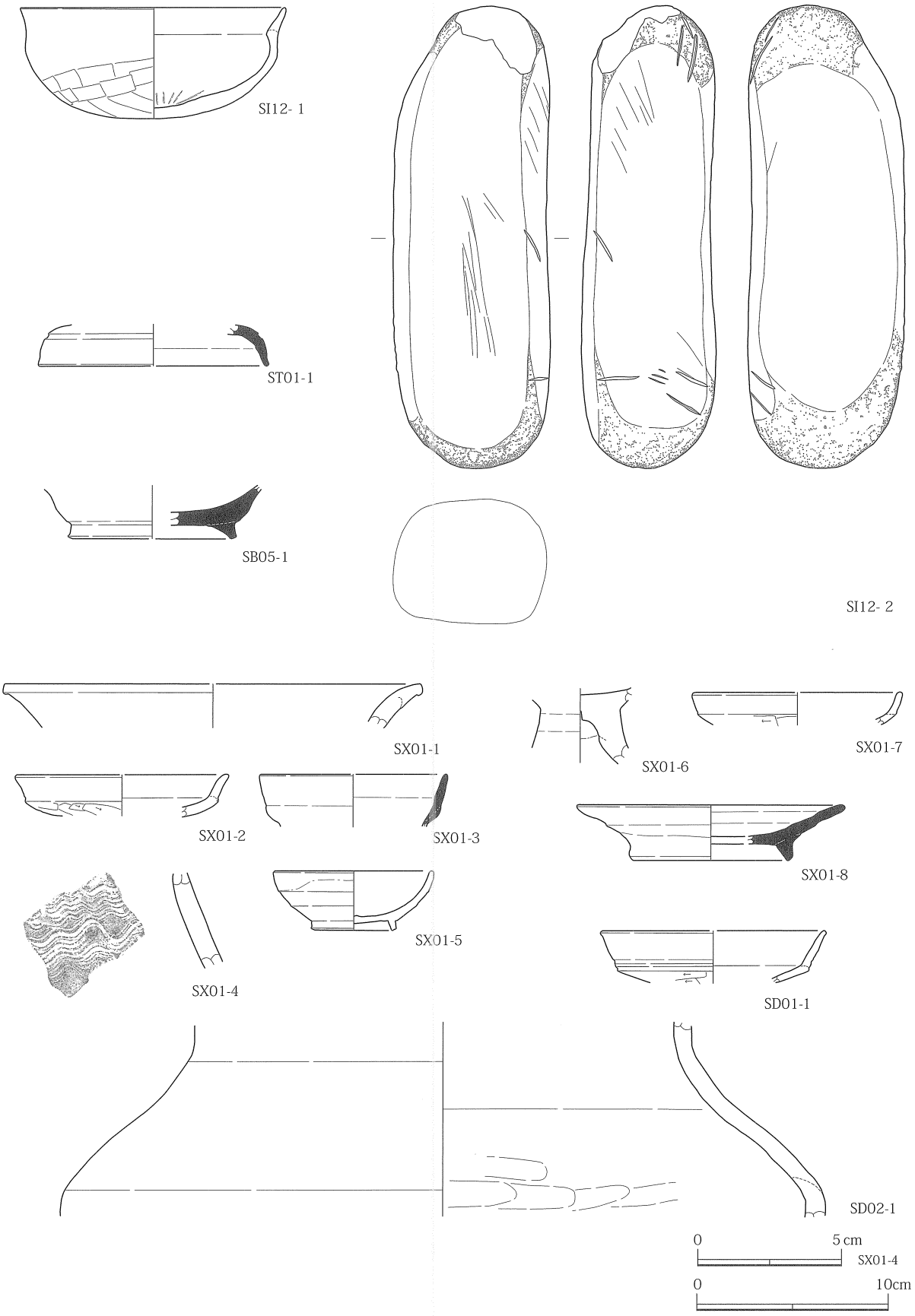
古墳時代の遺物には、中期に帰属する坏（SI-02－1・SI-11－1・SI-12－1）や高坏（SD-03－3）がある。また古墳時代後期の有段口縁坏（SI-02－2）もある。韓式系土器が2点出土している（SD-03－2・遺構外－1）。いずれも軟質土器である。遺構外－1の韓式系土器は、2区検出面より出土している。韓式系土器は小破片においてもこの2点に止まる。この2点の韓式系土器は、いずれも体部片で、外面に格子状タタキ目が見られる。臼玉（SI-10－3）は、滑石製で灰白色を呈する。その形態や石材から、古墳時代後期に位置づけられる可能性が高い。古墳時代に位置づけられる遺物は、調査区西側で出土する傾向が高い。埴輪（遺構外－2）は、1区SI-05の東から出土している。器面の荒れが激しいが、突帯の低い円筒埴輪片である。埴輪片は小破片においてもこの1点のみである。

古代の遺物は、土師器の他に須恵器も多く出土している。P-14－1は、削り出し高台をなしており、7世紀末から8世紀初頭の時期が比定される。SD-03－5土師器坏は、9世紀に位置づけられるか。その他SI-10－1のような7世紀後半に位置づけられる須恵器蓋やSI-14－3のような10世紀後半に比定されるものまである。古代に比定される遺物は、調査区全域で出土している。

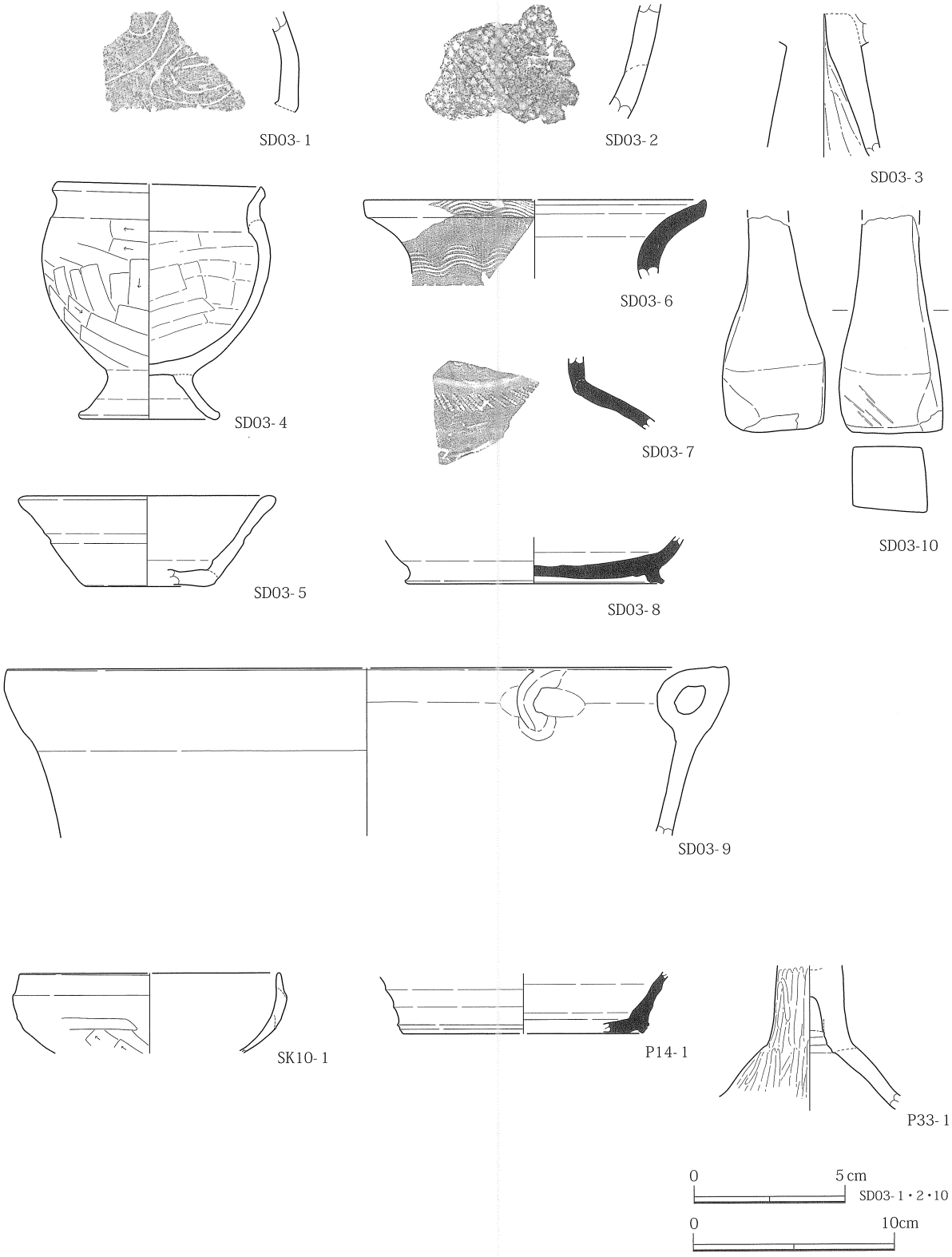
中近世に帰属するものの多くは、耕作土中もしくは耕作土直下から出土している。ただしSD-02号溝－1は、常滑の甕で、溝覆土中より出土している。なお1区北側においては、遺構検出面からは当該期の遺構は確認されなかったが、比較的多くの近世遺物が出土しており、小規模な遺構が存在した可能性がある。



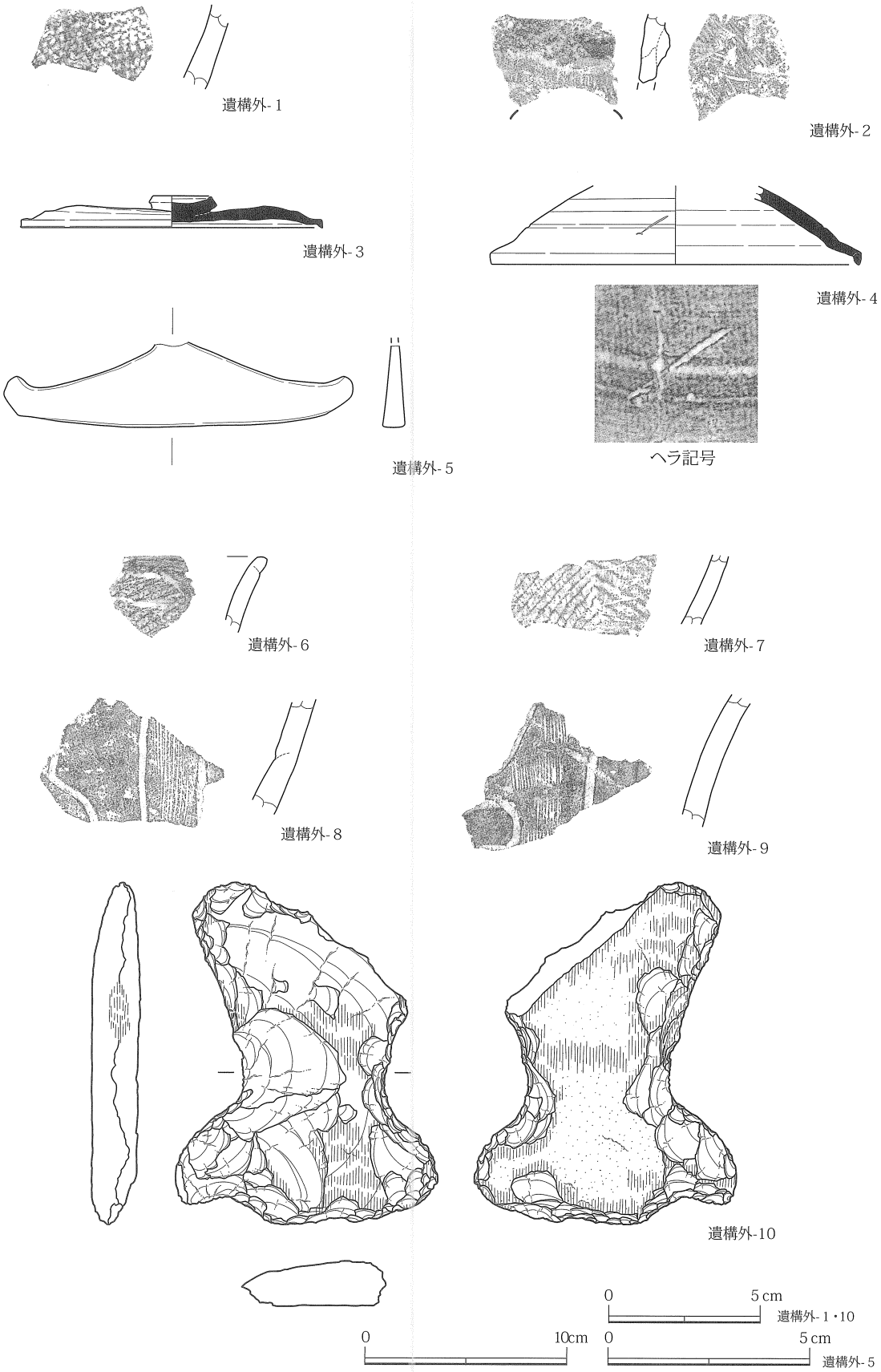
第 33 図　出土遺物実測図（1）



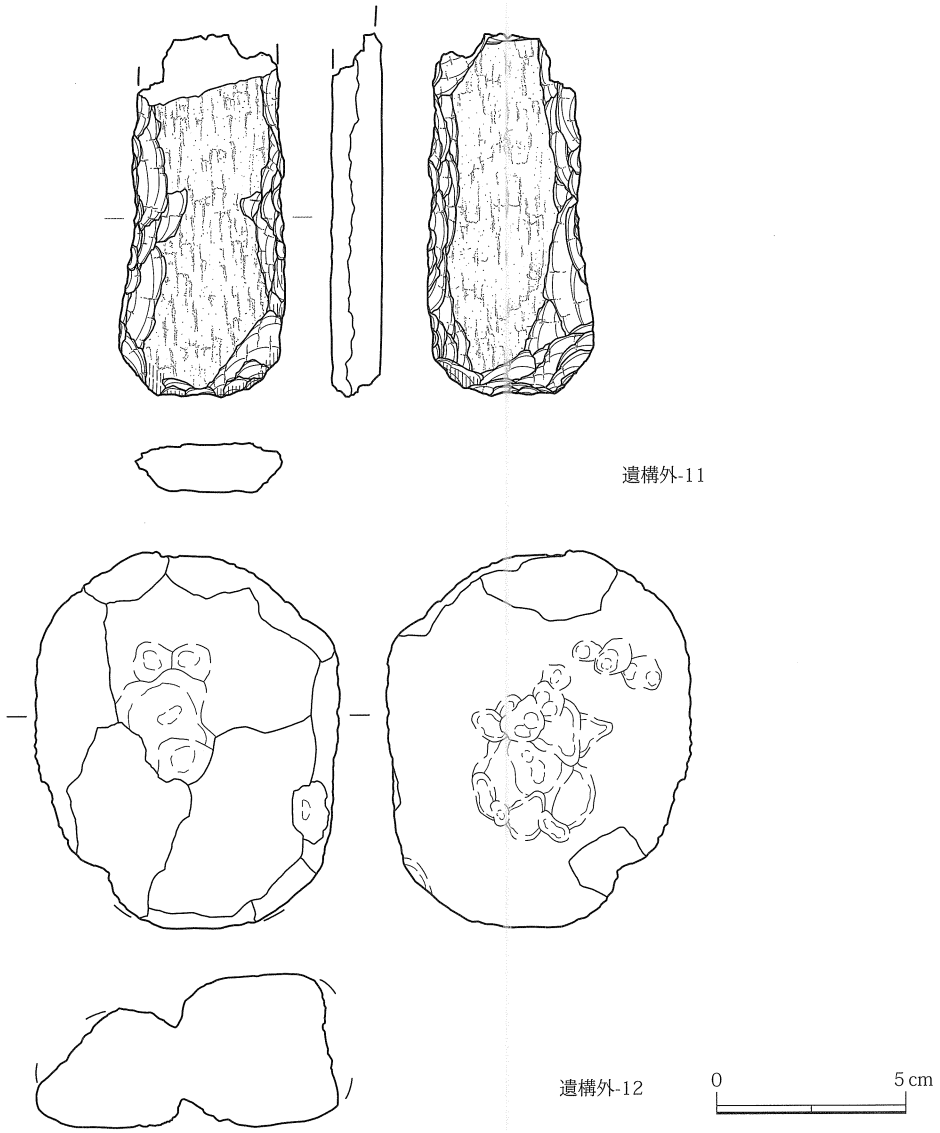
第 34 図　出土遺物実測図（2）



第35図　出土遺物実測図（3）



第36図　出土遺物実測図（4）



第37図　出土遺物実測図（5）

表2　遺物観察表（1）

（　）：復元値、［　］：残存値を示す

遺構名	遺物No.	器種	法量（cm）	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SI01	1	土師器 坏	口径　(11.6) 底径　— 器高　[3.0]	①普通②橙色 ③白色粒、角閃石④径 1/8	外面　口縁部ナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	
	2	土師器 坏	口径　(12.8) 底径　— 器高　[2.5]	①普通②橙色 ③白色粒、角閃石④径 1/8	外面　口縁部ナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	
SI02	1	土師器 坏	口径　(14.0) 底径　— 器高　[2.0]	①良好②橙色 ③角閃石、赤色・白色粒④径 1/16	外面　ナデ調整。 内面　ナデ調整。	
	2	土師器 坏	口径　(13.3) 底径　— 器高　[3.3]	①普通②にぶい橙色 ③白色粒、角閃石④径 1/4	外面　体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	有段口縁。
	3	須恵器 蓋	口径　(15.0) 底径　— 器高　[2.2]	①良好②灰色 ③石英④径 1/16	外面　頂部ロクロナデ整形。 内面　ロクロ整形。	

表３　遺物観察表（２）

遺構名	遺物№	器種	法量（cm）	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SI02	4	須恵器 坏か	口径　－ 底径　(10.0) 器高　[2.1]	①良好②灰色 ③白色・黒色粒④径 1/5	外面　回転ヘラケズリ。 内面　ロクロ整形。	
SI03	1	磁器 碗	口径　(10.0) 底径　－ 器高　[4.0]		外面　筆描　草花文	
	2	磁器 碗	口径　－ 底径　－ 器高　[3.2]		外面　筆描 内面　圏線	
	3	土師器 坏	口径　(11.4) 底径　－ 器高　[2.1]	①普通②橙色 ③白色・黒色粒④径 1/8	外面　体部ヘラケズリ。底部ケズリ出し。 内面　ナデ調整。	
SI04	1	土師器 坏	口径　(12.0) 底径　－ 器高　[2.2]	①普通②にぶい褐色 ③石英④径 1/8	外面　口縁部ナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	
	2	土師器 坏	口径　(13.0) 底径　－ 器高　[2.1]	①普通②明赤褐色 ③石英④径 1/8	外面　口縁部ナデ。体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	
	3	須恵器 蓋	口径　－ 底径　－ 器高　[2.2]	①良好②灰黄色 ③白色・黒色粒④径 1/4	外面　ロクロ整形。 内面　カキメ。	
	4	瓦器 不明	口径 底径 器高	①良好②黒褐色 ③白色粒、海綿骨針	外面　ロクロナデ。 内面　ロクロナデ。	
	5	火鉢	口径　－ 底径　－ 器高　[9.0]	①良好②黒褐色 ③白色石	外面　タタキか。 内面　ロクロ整形。	内面煤付着。
SI07	1	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 器高　[4.3]	①普通②橙色 ③石英、赤色粒④径 1/4	外面　ヘラナデ。 内面　坏部ナデ調整。脚部ユビナデ。	
SI09	1	土師器 坏	口径　(12.0) 底径　－ 器高　[2.3]	①普通②にぶい橙色 ③石英④径 1/10	外面　ナデ調整。底部ケズリ。 内面　ナデ調整。	
SI10	1	須恵器 蓋	口径　(14.0) 底径　－ 器高　[2.1]	①良好②灰色 ③白色粒④径 1/8	外面　天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロ整形。	
	2	鉄器 刀子	長さ：[2.5]　幅：1.2　厚さ：0.1			
	3	石製品 臼玉	長径：1.4　短径：1.3　厚さ：0.7　滑石製			
SI11	1	土師器 坏	口径　(13.2) 底径　－ 器高　[3.4]	①普通②橙色 ③白色粒、角閃石 ④径 1/16	外面　体部ヘラケズリ。 内面　ミガキ。	
SI12	1	土師器 坏	口径　13.9 底径　－ 器高　5.9	①普通②明赤褐色 ③石英、赤褐色粒④全体 4/5	外面　体・底部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。工具痕あり。	
	2	石器 砥石	長さ：24.14　幅：8.2　厚さ：7.0　重量：7.0　砂岩 煤付着			
SX01	1	土師器 甕	口径　(22.0) 底径　－ 器高　[2.3]	①普通②橙色 ③石英、赤色粒④径 1/8	外面　ナデ調整。 内面　ナデ調整。	SI-13 掘方出土。

表４　遺物観察表（３）

遺構名	遺物№	器種	法量（cm）	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SX01	2	土師器 坏	口径　(11.2) 底径　－ 器高　[2.2]	①普通②橙色 ③石英、角閃石④径 1/16	外面　体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	SI-13 掘方 出土。
	3	須恵器 坏	口径　(9.8) 底径　－ 器高　[2.8]	①良好②灰色 ③白色粒④径 1/8	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	SI-13 掘方 出土。
	4	弥生土器 壺	口径　－ 底径　－ 器高　[3.3]	①普通②にぶい黄橙色 ③白色粒、角閃石	外面　櫛描波状文。 内面　ミガキ。	SI-13 掘方 出土。
	5	陶器 碗	口径　8.4 底径　4.2 器高　3.1	②＜釉以外＞にぶい橙色④径 1/2	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	SI-13 床面 出土。
	6	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 器高　[3.9]	①普通②橙色 ③石英、赤色粒④径 100％	外面　横位ナデ。 内面　坏部黒色処理。	SI-14 掘方 出土。
	7	土師器 坏	口径　(11.0) 底径　－ 器高　[1.7]	①普通②にぶい褐色 ③角閃石④径 1/12	外面　体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	SI-14 掘方 出土。
	8	須恵器 坏	口径　(14.0) 底径　(8.0) 器高　2.9	①良好②灰黄色 ③石英、黒色粒④径 1/2	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	SI-14 床面 出土。
ST01	1	須恵器 蓋	口径　(12.0) 底径　－ 器高　[2.2]	①良好②灰色 ③石英④径 1/8	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	
SB05	1	須恵器 坏	口径　－ 底径　(8.8) 器高　[2.8]	①良好②灰白色 ③石英、黒色粒④径 1/2	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	Ｐ４出土。
SD01	1	土師器 坏	口径　(11.8) 底径　－ 器高　[2.7]	①粗②橙色 ③白色粒・赤褐色粒④径 1/8	外面　体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	
SD02	1	常滑 甕	口径　－ 底径　－ 器高　[10.2]	①良好②褐色 ③石英④径１/８	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。一部ユビナデ。	
SD03	1	縄文土器か ミニチュア	口径　－ 底径　－ 器高　[3.3]	①普通②にぶい黄橙色 ③白色粒、角閃石	外面　弧状線刻文。 内面　ナデ調整。	
	2	韓式系土器	口径　－ 底径　－ 器高　[3.7]	①普通②橙色 ③石英、黒色・赤色粒	外面　格子目タタキ。 内面　ナデ調整。	
	3	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 器高　[7.1]	①良好②明赤褐色 ③白色・赤色・黒色粒④径 1/8	外面　ナデ整形。 内面　ユビナデ。	
	4	土師器 甕	口径　(10.6) 底径　(7.0) 器高　11.7	①普通②明赤褐色 ③石英、角閃石④径 2/3	外面　体部ヘラケズリ。台部ナデ。 内面　体部ヘラナデ。	
	5	土師器 坏	口径　(12.8) 底径　(6.0) 器高　4.5	①粗②にぶい黄橙 ③白色粒、角閃石④径 1/4	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	
	6	須恵器 瓶類	口径　(17.0) 底径　－ 器高　[3.9]	①良好②灰色 ③白色・黒色粒④径 1/6	外面　波状文。 内面　ロクロ整形。	

表５　遺物観察表（４）

遺構名	遺物№	器種	法量（cm）	①焼成②色調③胎土④残存	成・整形技法の特徴	備考
SD03	7	須恵器 壺	口径　－ 底径　－ 器高　[3.6]	①良好②灰色 ③白色・黒色粒④径 1/6	外面　頸部波状文。肩部列点文。 内面　ロクロ整形。	
	8	須恵器 壺か	口径　－ 底径　(12.8) 器高　[2.3]	①堅緻②灰色 ③白色・黒色粒④径 1/8	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	
	9	瓦器 焙烙	口径　(36.0) 底径　－ 器高　[8.4]	①良好②灰色 ③白色粒④径 1 /10	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	内耳。
	10	石製品 砥石	長さ：[7.2]　最大幅：3.4　厚さ：2.2　凝灰岩製			
SK10	1	土師器 坏	口径　(13.0) 底径　－ 器高　[4.0]	①普通②赤褐色 ③石英、黒色粒④径 1/8	外面　体部ヘラケズリ。 内面　ナデ調整。	
P14	1	須恵器 坏	口径　－ 底径　(12.0) 器高　[3.1]	①良好②灰色 ③石英④径 1/6	外面　ロクロ整形。底部ケズリ出し。 内面　ロクロ整形。	
P33	1	土師器 高坏	口径　－ 底径　－ 器高　[7.2]	①普通②明赤褐色 ③白色・赤色粒、角閃石④径 1/4	外面　ミガキ。 内面　ナデ調整。	
遺構外	1	韓式系土器	口径　－ 底径　－ 器高　[2.9]	①普通②橙色 ③石英、角閃石	外面　格子目タタキ。 内面　ナデ調整。	
	2	埴輪 円筒	口径　－ 底径　－ 器高　[4.5]	①普通②明赤褐色 ③石英、角閃石	外面　縦位ハケメ。 内面　縦位基調ハケメ。	透孔１。
	3	須恵器 蓋	口径　(15.0) 底径　－ 器高　1.6	①良好②灰色 ③白色粒④径 1/3	外面　ロクロ整形。 内面　ロクロ整形。	
	4	須恵器 蓋	口径　18.2 底径　－ 器高　[3.9]	①良好②黄灰色 ③石英④径 2/3	外面　天井部回転ヘラケズリ。 内面　ロクロ整形。	ヘラ記号。
	5	鉄器 火打ち金	長さ：6.5　幅：[6.5]　厚さ：0.4			
	6	縄文土器	口径　－ 底径　－ 器高　[3.8]	①粗②にぶい黄橙 ③石英、赤褐色粒、繊維	無節Ｒ縄文。	
	7	縄文土器	口径　－ 底径　－ 器高　[3.5]			６と同一個体。
	8	縄文土器	口径　－ 底径　－ 器高　[5.6]	①普通②にぶい黄橙 ③石英、角閃石	棒状工具による太い沈線で区画し、鋭利な工具による集合短沈線を施す。	
	9	縄文土器	口径　－ 底径　－ 器高　[6.5]	①普通②灰黄褐色 ③白色粒、角閃石	棒状工具による太い沈線で区画し、鋭利な工具による集合短沈線を施す。	
	10	打製石斧	長さ：11.3]　幅：[8.65]　厚さ：[1.60]　重量：160.2　頁岩 分銅形			
	11	打製石斧	長さ：[9.66]　幅：4.4　厚さ：1.37　重量：84.8　片岩 短冊形			
	12	凹石	長さ：9.95　幅：8.1　厚さ：4.1　重量：315.2　安山岩 切り合い関係は、凹→磨			

Ⅵ　まとめ

・はじめに

八幡中原遺跡は、第１次調査において古墳時代中期から奈良・平安時代の竪穴住居跡 176 棟、掘立柱建物跡36棟が検出されており、その規模からしても当地における拠点的な集落であったことが窺える。その他、旧石器、縄文、弥生、古墳時代初頭の遺物が出土しているが、遺構としては古墳時代中期からのものが確認されているようである。今回の第３次調査においても、同様に縄文、弥生、古墳時代前期の遺物が出土しており、第１次調査地点に連続するものと想定される。以下、特筆される点を列記していく。

・韓式系土器

韓式系土器が２点出土している。いずれも体部片と想定される軟質土器で、表面には格子目タタキを施している。一つ（SD03 － 2）は SD － 03 号溝覆土中から、一つ（遺構外－１）は２区検出面から出土している。周辺の遺跡では八幡中原遺跡第１次調査地点・八幡遺跡・七五三引遺跡・剣崎長瀞西遺跡においても出土しており、この一帯が韓式系土器が多く出土する所として以前から注目されてきた。八幡中原遺跡第１次調査地点では古墳時代後期の住居跡から、七五三引遺跡では古墳時代中期後半の住居跡から韓式系土器が出土している。韓式系土器を集成した黒田晃によると、韓式系土器は八幡中原遺跡を含む榛名山東南麓一帯と井野川沿いの２ヶ所に集中するという（黒田 2000）。八幡中原遺跡の一帯は、古代道路である野後駅（安中）から群馬駅へ向かう「国府ルート」と東へまっすぐ延びるとされる「牛堀・矢ノ原ルート」・「下新田ルート」の分岐点にあたり、交通の要衝として位置づけられている。それらに先行するものとして、古墳時代においても交通の要衝であったことは想像に難くなく、そこから韓式系土器が出土することは、そのような交通路との関連が考えられるのである。

剣崎長瀞西遺跡の韓式系土器を分析した酒井清治によると、韓式系土器が出土した住居跡はいずれも台地縁辺部に位置しすなわち集落の中核とは言えない住居跡で出土しているとしている（酒井 2003）。つまり集落の主体はあくまでも在来の集団であり、韓式系土器を有する人達はその在来集団によって編成された状況を示唆していると言えるだろう。なお剣崎長瀞西遺跡で出土した韓式系土器は伽耶系の可能性が高いと指摘している。また同遺跡の積石塚古墳を分析した土生田純之によると、中核となる古墳は円墳であり、方形積石塚古墳はその周辺の標高の低い位置に立地するという指摘とも繋がってくるであろう（土生田 2003）。これらのことからも八幡中原遺跡一帯の韓式系土器を有する集団は、あくまでも在来集団を主体とした社会の中に構成され、とくに交通の要衝において特定の職掌を得ていた可能性も視野に入れておいてよいだろう。剣崎長瀞西遺跡では、殺馬儀礼による馬の埋葬土坑が確認されていることなどから、馬匹生産との関連性が想定されている。

・大溝（SD － 03）

本調査地点では、南北に縦断する SD － 03 号溝が検出され、その東西で集落が区画される可能性が想定された。SD － 03 号溝は流水の様相はなく、その規模からしても１次調査地点から続く集落が分断されるものと考えられる。SD － 03 号溝の時期については明確には出来なかったが、As-B 軽石によって埋没しており、その下限については明らかとなった。類似する溝としては、安中市と富岡市にまたがる横野台地で確認されている牧関連遺構の大溝が挙げられる（中野谷地区遺跡群・下高田遺跡群）。その断面形態は、SD － 03 号溝と同様、壁面が斜位掘り込まれ、その下端部に至って垂直に落ち込む。また掘り込まれる土層も、As-YP 層下までといった点も類似する。さらに同様に覆土上層において As-B 軽石がレンズ状に堆積している。横

野台地における牧関連の大溝は7世紀代に掘削されたと推定されており、以上のような点からもSD－03号溝はこの時期に掘削された溝の特徴を有していると言えるだろう。なおSD－03号溝はすぐ西側に大規模集落（八幡中原遺跡第1次調査地点）を営んでいることからも、まず集落を区画した溝と考えられる。ただし剣崎長瀞西遺跡が馬匹生産と関係した集落であることは留意すべきである。

・基壇状遺構

基壇状遺構が1基確認された（SX－01）。その時期および性格については、明らかには出来なかった。遺構の詳細は本文中の通りであるが、掘り込み地業を行い、ロームと黒色土の版築が認められる。掘り方からは7世紀後半の土師器片が出土しており、それ以降の帰属時期が与えられる。1区南側に広がる掘立柱建物跡は、SX－01のある一帯には広がっておらず、同時期に存在した可能性もある。遺構内およびその周辺からも本遺構の性格を決定するような遺物は出土していない。なおその周辺にある不整形な竪穴状遺構(SI－02など）は、版築用の土を採取した痕跡の一端である可能性も否定できない。

同様の遺構は、東に位置する七五三引遺跡で確認されている（SX－01）。その規模は、東西12.0 m・南北11.8 mを計測する平面正方形を呈する。時期を確定できる遺物は出土していないが、古墳時代中期の住居跡を切っている。同様に掘り込み地業を行っており、深さ35cm～40cmの掘り込みを設け、ローム・ローム小ブロック・ＹＰを主体とした黄褐色土と黒色土によって版築を施している。その規模、および掘り込みの深さや版築の状況は、本調査で確認されたものと酷似している。また主軸方位において、北を主軸として八幡中原遺跡のものも、七五三引遺跡のものも同様にわずかに東に傾く。ただし八幡中原遺跡では、周囲に柱穴が廻っていたのに対して、七五三引遺跡では周囲には柱穴は確認されない。

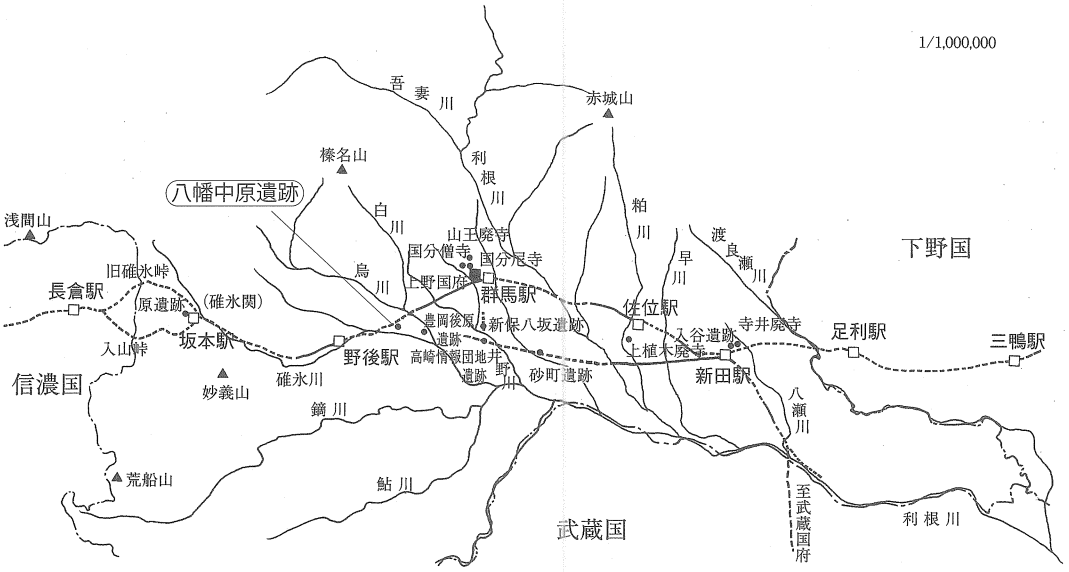
このような遺構が近在することは、この一帯が一般集落とは異なった性格を有していた可能性が指摘される。ここで整理中ではあるが、本遺跡と類似する状況がみられる太田市笠松遺跡を覚書として挙げておく[(1)]。笠松遺跡は、新田郡庁と推定されている天良七堂遺跡から西に500 mの所に位置する遺跡で、「牛堀・矢ノ原ルート」と「下新田ルート」に挟まれた位置にあたる。そこでは掘立柱建物跡13棟やAs－B軽石を覆土に包含する溝とともに東西約9 mの基壇状遺構とされる掘り込み地業が確認されている。その詳細や評価については、報告書を待ちたいが、八幡中原遺跡と類似する状況が窺える。とくに古代交通路やその拠点に近在する点、大溝や掘立柱建物が伴う点は、何らかの複合的関係をもって構築されたものと考えられるのである。

・おわりに

以上、述べてきたように八幡中原遺跡は、以前から指摘されてきたように交通の拠点としての性格を有している。本遺跡が交通路との関係性の中でどのような広域的関係をもって営まれていったか、そのような比較検討が必要なのは言うまでもない。しかし、その一方でそのような拠点集落の内部について分析する必要もある。古墳時代においては、韓式系土器をはじめとする渡来系遺物が集落内でどのような位置づけになるかといった分析は、集落内構造を把握する上で重要な視点となる。とくにそのような渡来系文物を有する集団が、在来集団とどのような関係性にあったかという評価は渡来系文物の実態を解明する上で重要である。

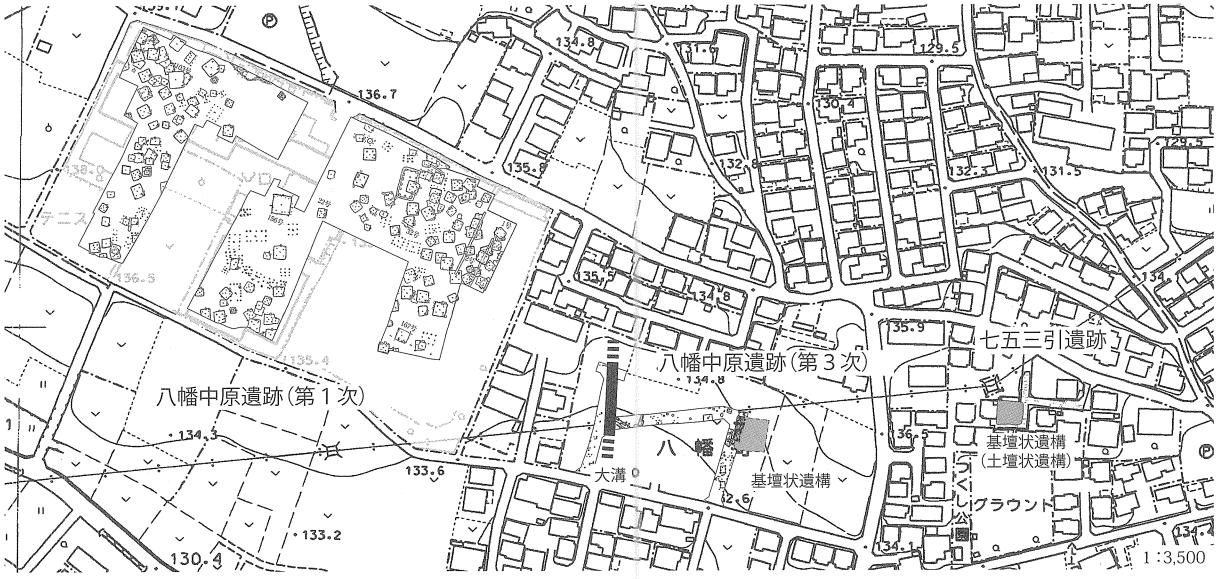
そして古代では、基壇状遺構や掘立柱建物、大溝がどのような空間的広がりをもって営まれ、集落を構成していたか把握する必要がある。おそらくそれらは一般的集落とは異なっており、周辺で確認されている同時代の遺跡との比較検討が必要となる。

(1) 長谷川博幸　2010「明らかになりつつある古代地域行政の拠点－太田市笠松遺跡の発掘調査で見えてきたこと－」『埋文群馬』№51　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　から参照・引用した。



第 38 図　東山道と主要遺跡

『新編 高崎市史 資料編２原始古代Ⅱ』から引用・改変



第 39 図　周辺遺跡状況

引用参考文献

黒田　晃　2000「剣崎長瀞西遺跡と渡来人」『高崎市史研究』第 12 号　高崎市

黒田　晃　2002『高崎市文化財調査報告書第 179 集　剣崎長瀞西遺跡１』　高崎市教育委員会

古代交通研究会　2004『日本古代道路事典』　八木書店

酒井清治　2003「日本の軟質土器と渡来人」『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』（平成 12 年度～平成 14 年度科学研究費補助金（基礎研究（C）（1））研究成果報告書）　専修大学文学部

高崎市史編さん委員会　2000『新編　高崎市史　資料編２原始古代Ⅱ』

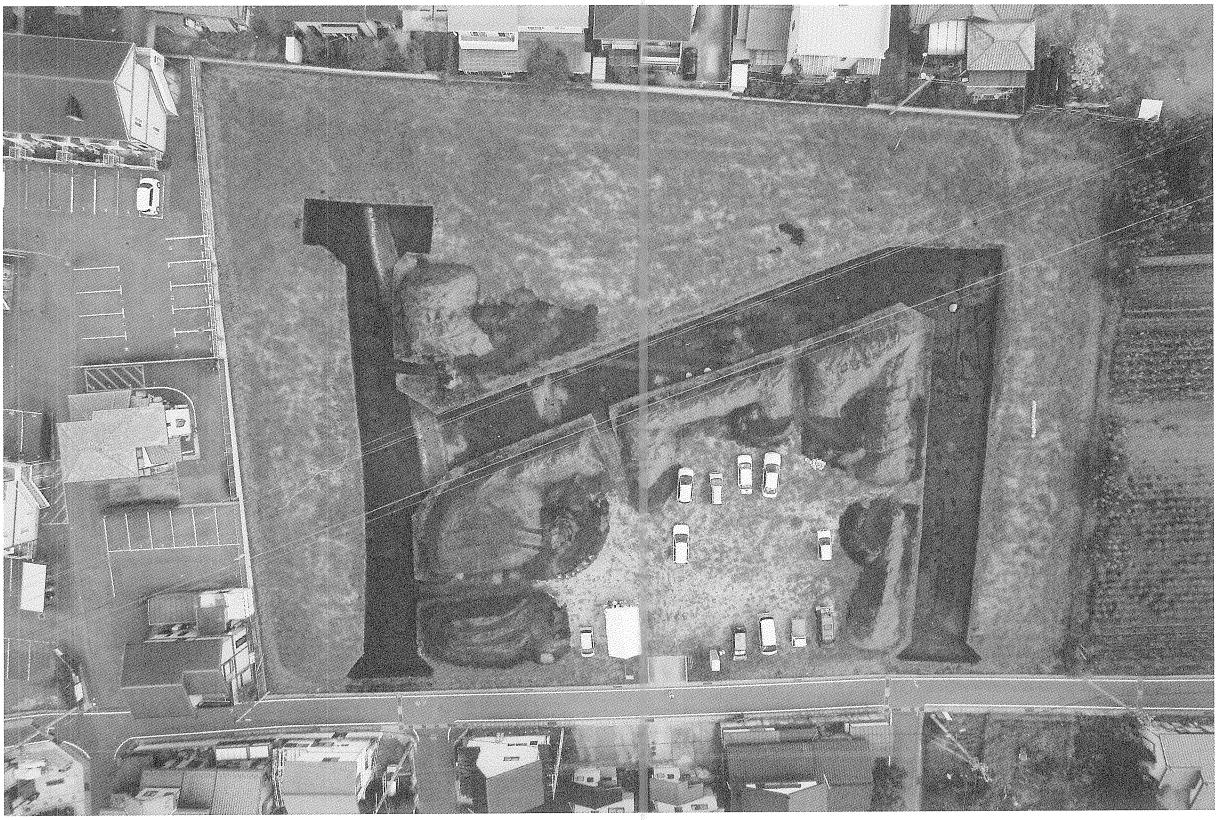
田村　孝　1984『七五三引遺跡』　高崎市教育委員会

土生田純之　2003「剣崎長瀞西遺跡Ⅰ区における方墳の性格」『剣崎長瀞西５・27・35 号墳』　専修大学文学部考古学研究室

神戸聖語ほか　1982『高崎市文化財調査報告書第 31 集　八幡中原遺跡』高崎市教育委員会

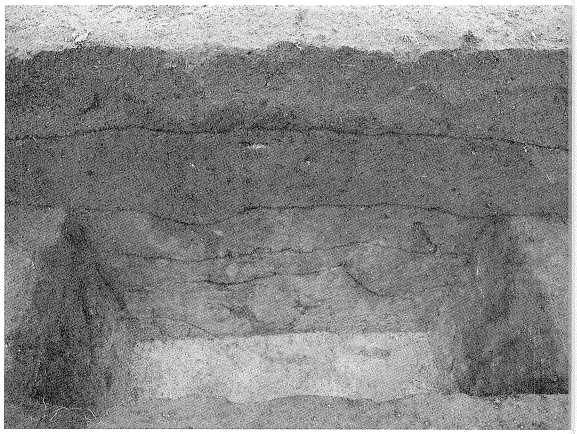
神戸聖語ほか　1990「５.八幡中原遺跡」『群馬県高崎市文化財調査報告書第 109 集　高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書』　高崎市教育委員会

写真図版



遺跡全景

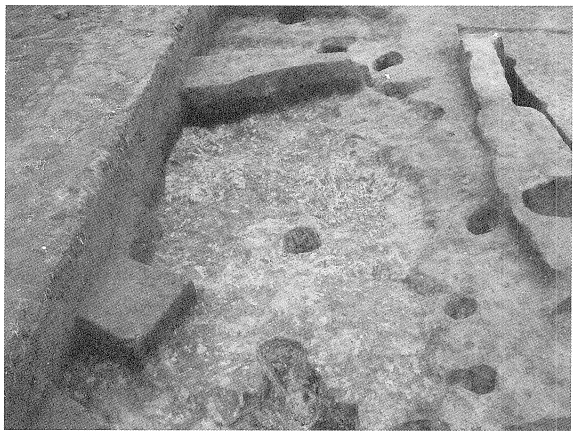
SD－03号溝（南より）



基本土層

SI－01 号住全景

SI－01 号住土層堆積状況



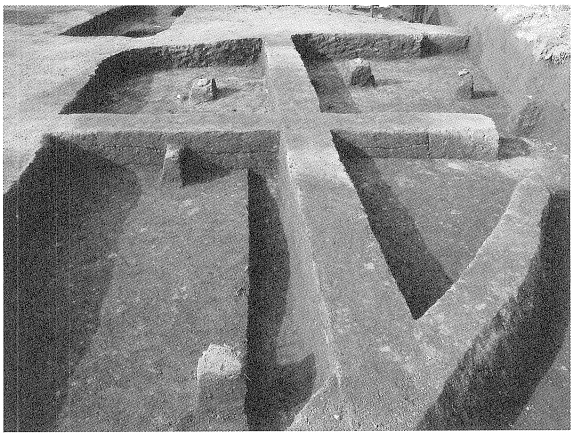
SI－02 号住全景

SI－02 号住土層堆積状況

SI－03 号住全景

SI－03 号住土層堆積状況

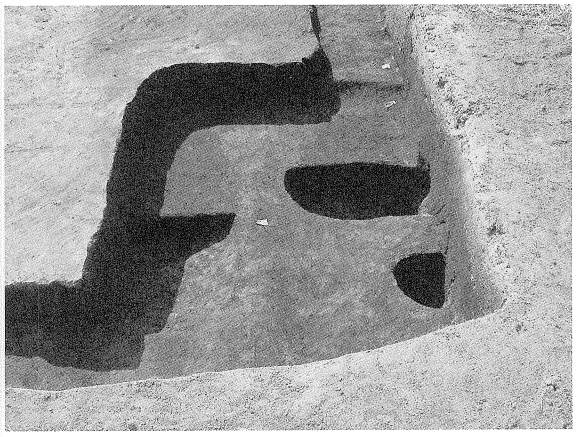
SI－04 号住全景



SI － 04 号住土層堆積状況

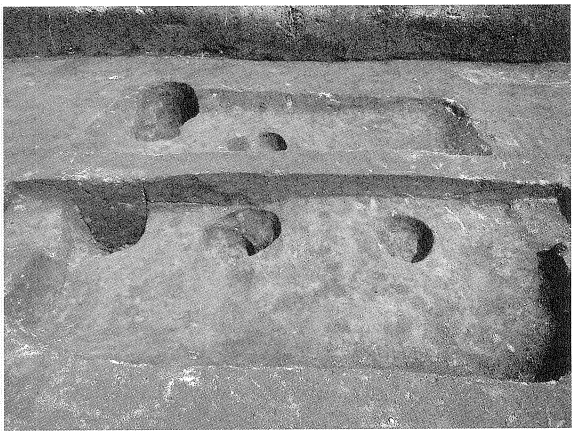
SI － 07 号住全景

SI － 07 号住土層堆積状況

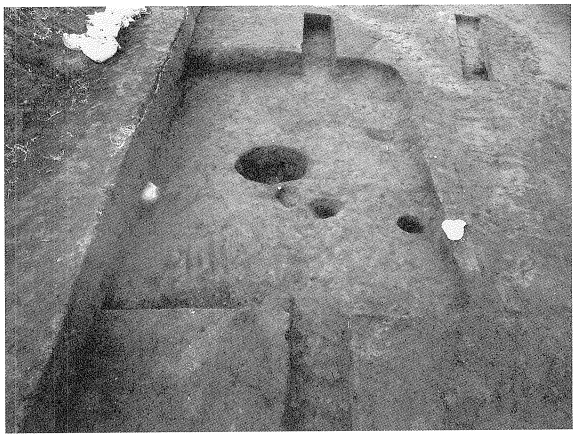


SI － 08 号住全景

SI － 09 号住全景



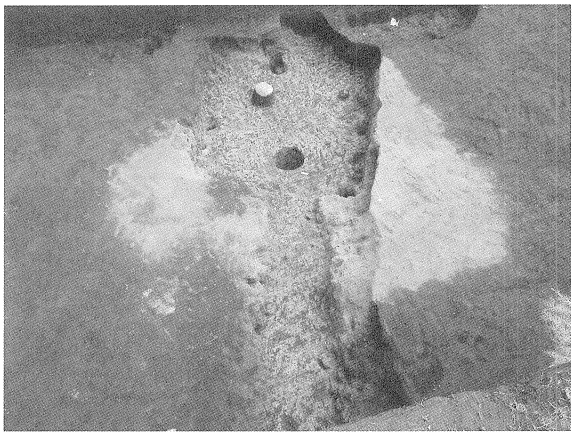
SI － 09 号住土層堆積状況



SI － 10 号住全景

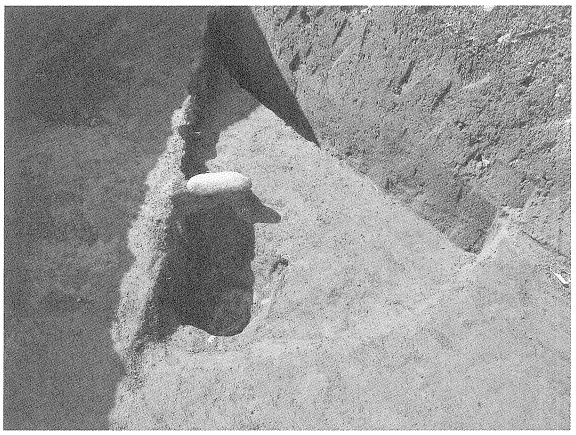
SI － 10 号住土層堆積状況

SI － 10 号住内 SK － 01 土層堆積状況



SI － 11 号住・SD － 01 号溝全景

SI － 11 号住Ｐ１土層堆積状況

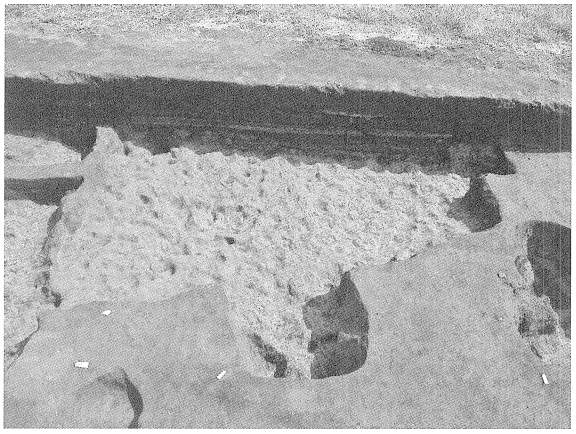


SI － 12 号住全景

SI － 12 号住Ｐ１遺物出土状況

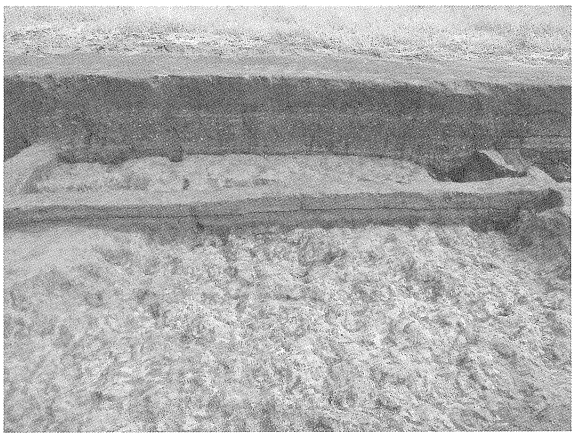
SX － 01（SI-05 部分）床面検出状況

SX － 01（SI-05 部分）土層堆積状況



SX － 01（SI-05 部分）掘り方全景

SX－01（SI-13 部分）床面検出状況

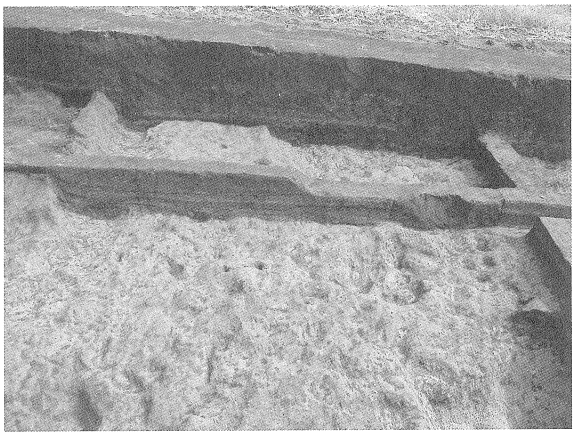


SX－01（SI-13 部分）土層堆積状況①

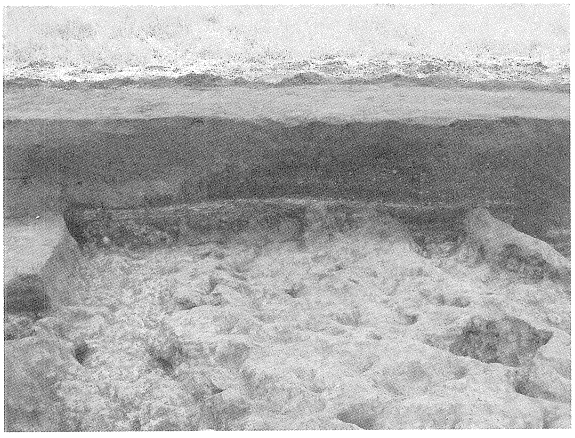
SX－01（SI-13 部分）土層堆積状況②

SX－01（SI-13 部分）掘り方全景

SX－01（SI-14 部分）床面検出状況



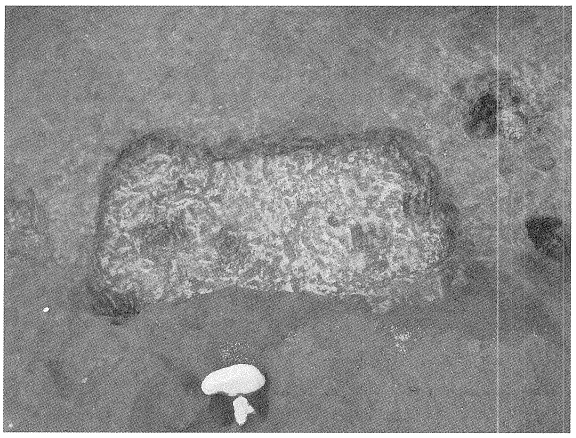
SX－01（SI-14 部分）土層堆積状況①



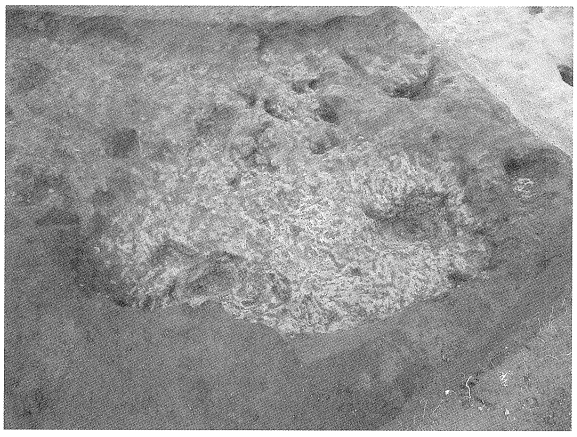
SX－01（SI-14 部分）土層堆積状況②

SX－01（SI-14 部分）掘り方全景

SX － 01（SI-14 部分）版築状況

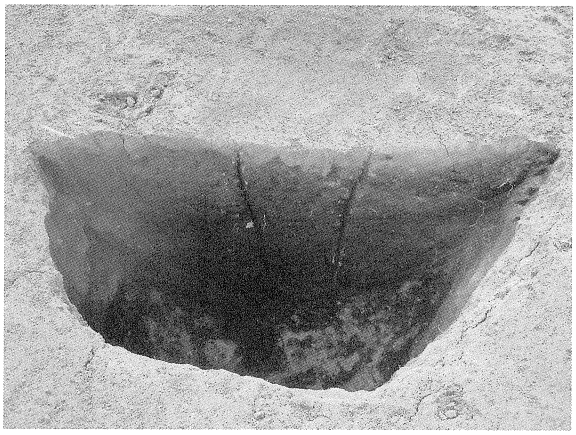


ST － 01 号竪穴全景

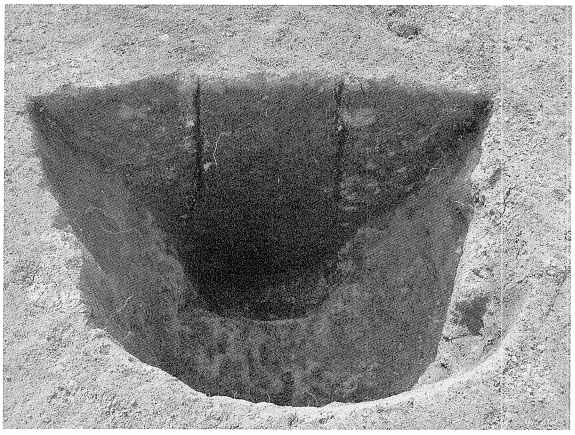


ST － 02 号竪穴全景

SB － 03 号掘立全景



SB － 03 号掘立Ｐ１土層堆積状況

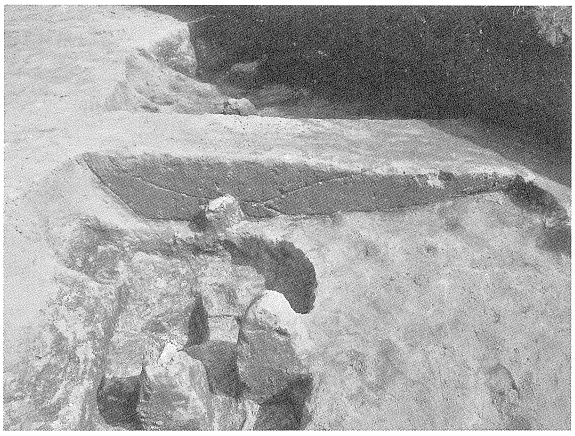


SB － 03 号掘立Ｐ４土層堆積状況

SB － 04 号掘立全景

SD － 01 号溝土層堆積状況

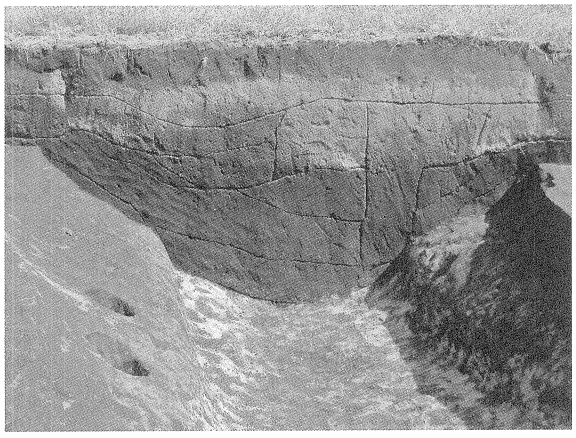
SD － 02 号溝全景



SD － 02 号溝土層堆積状況

SD － 03 号溝（北区）全景

SD － 03 号溝（南区）全景



SD － 03 号溝土層堆積状況①

SD － 03 号溝土層堆積状況②

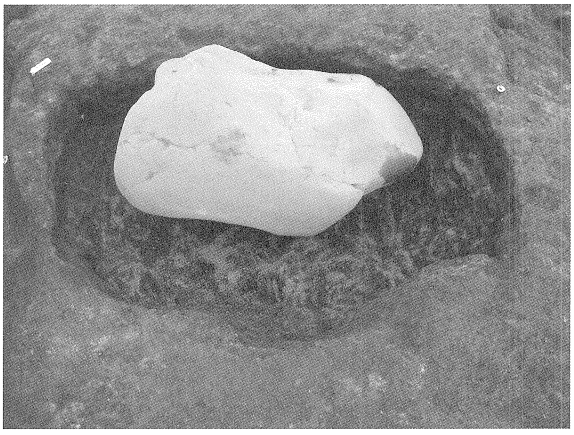
SD － 03 号溝土層堆積状況③

SD － 03 号溝西壁刳り込み

SD － 03 号溝東壁刳り込み

SD － 03 号溝遺物出土状況

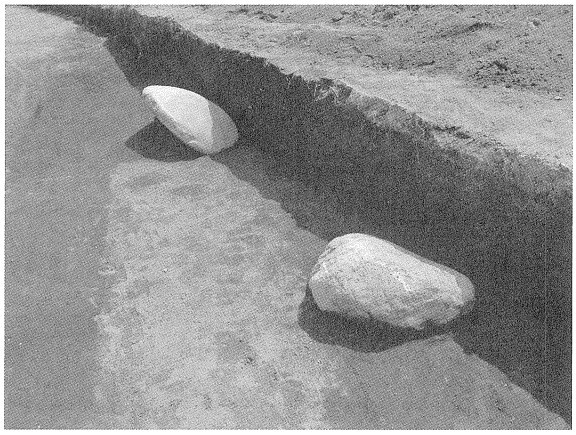
SD － 04 号溝全景



1 号大形礫全景

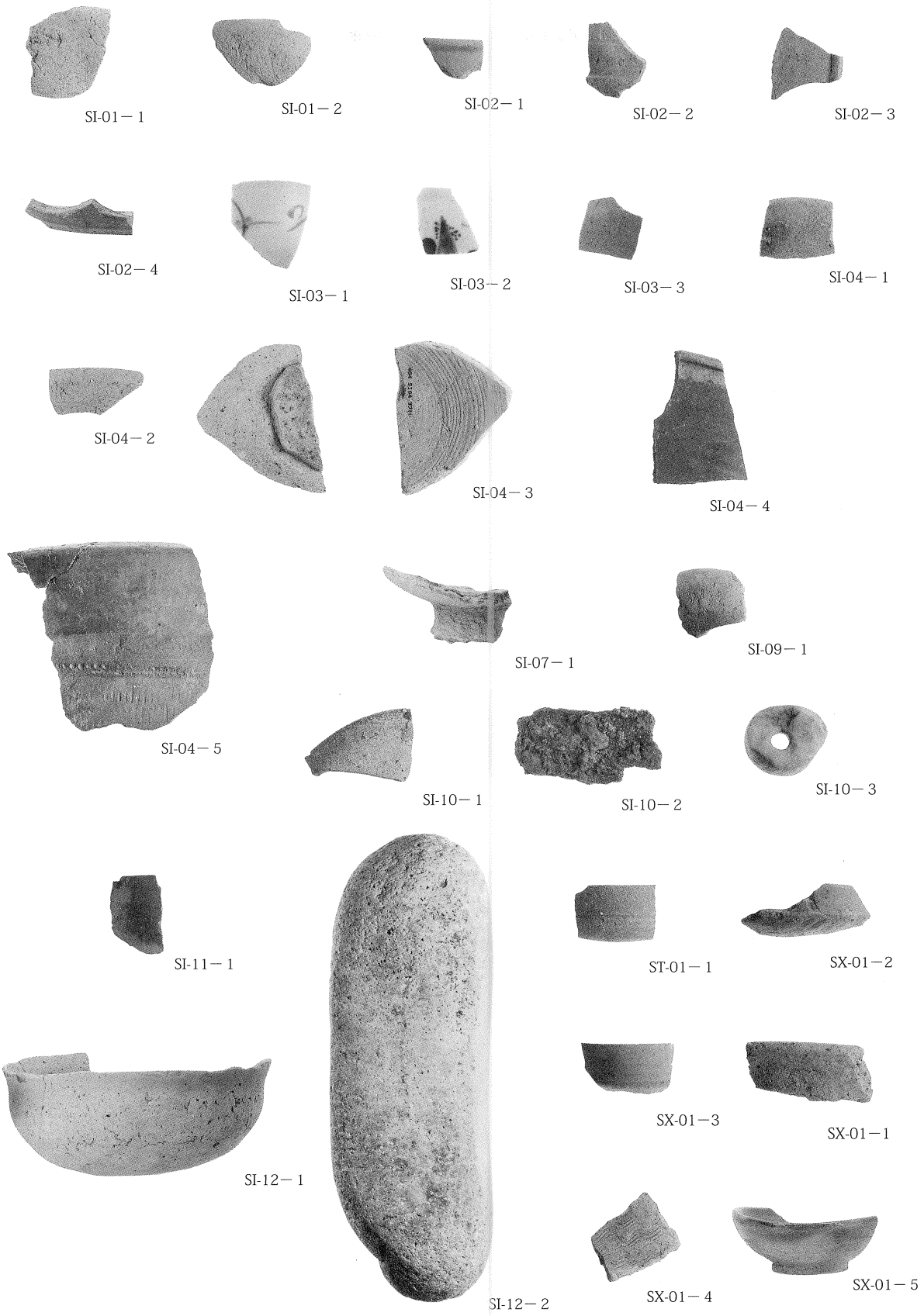
2 号大形礫全景

2 号大形礫工具痕



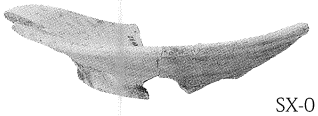
3 号・4 号大形礫全景

発掘作業風景


SI-01－1
SI-01－2
SI-02－1
SI-02－2
SI-02－3
SI-02－4
SI-03－1
SI-03－2
SI-03－3
SI-04－1
SI-04－2
SI-04－3
SI-04－4
SI-04－5
SI-07－1
SI-09－1
SI-10－1
SI-10－2
SI-10－3
SI-11－1
ST-01－1
SX-01－2
SX-01－3
SX-01－1
SI-12－1
SI-12－2
SX-01－4
SX-01－5

出土遺物（１）

SX-01－7


SX-01－8

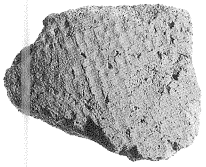
SB-05－1

SD-01－1

SD-03－1

SD-03－3

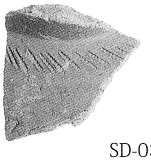
SD-02－1


SD-03－2

SD-03－4

SD-03－5

SD-03－6


SD-03－7

SD-03－8

SD-03－9

SD-03－10

SK-10－1

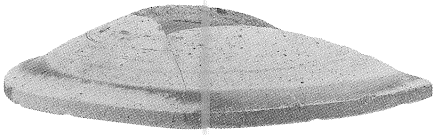
P-14－1

出土遺物（２）

P-33－1

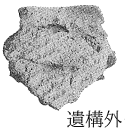
遺構外－1

遺構外－2

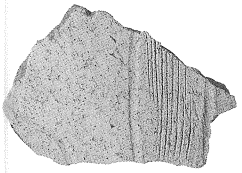


遺構外－4

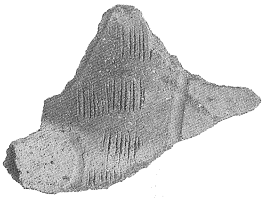
遺構外－3



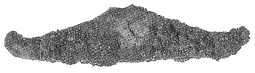
遺構外－6



遺構外－8



遺構外－9



遺構外－5

遺構外－7

遺構外－10

遺構外－11

遺構外－12

出土遺物（３）

報告書抄録

フリガナ	ヤワタナカハライセキ
書名	八幡中原遺跡３
副書名	土地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第282集
編著者名	田口一郎　石丸敦史
編集機関	高崎市教育委員会 〒370-8501　群馬県高崎市高松町35番地１　℡ 027-321-1292
発行機関	高崎市教育委員会
発行年月日	平成23年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
やわたなかはらいせき 八幡中原遺跡	ぐんまけん たかさきし 群馬県高崎市 やわたまち あざなかはら 八幡町字中原 1280番地２他	102020	484	36°20′36″	138°56′45″	20100824 ～ 20101006	1,063㎡	土地分譲

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡中原遺跡	集落	古墳時代～古代	竪穴建物跡　10棟 竪穴状遺構　２基 掘立柱建物跡　３棟 基壇状遺構　１棟 溝　３条 土坑・ピット　104基	縄文土器 石器（縄文） 土師器 韓式系土器 須恵器 石器・石製品 中世陶器 近世陶磁器 鉄器	１次調査地点から続く集落を区画する大溝が検出された。基壇状遺構が検出された。

高崎市文化財調査報告書第282集

八幡中原遺跡３

－土地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成23年３月23日印刷
平成23年３月31日発行

編集／高崎市教育委員会
発行／高崎市教育委員会
印刷／朝日印刷工業株式会社